

古代朝鮮の祭祀遺物に関する一考察

—異形土器をめぐる—

東 潮

I はじめに	(4) 車形土器
II 異形土器の分類	(5) 龍亀形土器
1 形象土器	(6) 家形土器
(1) 鳥形土器	2 装飾土器・土偶
(2) 馬形土器	III 異形土器の時期と分布
(3) 船形土器	IV おわりに

I はじめに

旧石器時代からの古代朝鮮における祭祀関係遺物については、発掘調査の進捗にともない新資料の出土が相次ぎ、関心も高まっている。その最たるものが「異形土器」や「土偶」に関する研究といえよう。祭祀遺跡や祭祀遺物のみを対象とした研究分野は寡聞にして知らないが、西谷正 1983「朝鮮の宗教考古学」・大井剛 1984「出土遺物による朝鮮原始信仰の研究」のような論考も発表されてきている。いっぽう1979年くらい、慶州において開催されている新羅文化祭学術発表会における「三国遺事の新研究」・「新羅民俗の新研究」と題する一連の研究成果は注目されよう。『三国遺事』・『三国史記』・「韓伝」などの研究、文献資料に対する民俗学的・考古学的方法による追究はきわめて有効であり、その典型例は、のちにふれる「蘇塗」をめぐる解釈にみることができる。それはまたわが国の弥生時代の鳥および鳥形木製品に対する解釈と密接なかかわりをもつことも明らかにされている（金関恕1975・82）。

古代朝鮮における祭祀遺跡・遺物の研究は、きわめて今日の問題でもあり、とくに民族的特質の解明といった重要な課題にも関連する。また三国時代の高句麗・新羅・百濟・伽耶の王権の祭祀的性格に関する研究なども看過しえないであろう。祭祀の構造的な把握も不可欠であり、古墳における葬送儀礼の解明など考古学的方法に課せられた問題は少なくない。

本稿では、旧石器時代からの時代ごとの考察はひとまず回避し、三国時代の祭祀遺

II 異形土器の分類

物、とりわけ異形土器・土偶に焦点をあわせて、今日における研究段階を整理するとともに、公表された資料をできうるかぎり網羅したいと思う⁽¹⁾。三国時代の新羅・伽耶における、特殊な土器の存在への認識、さらにわが国の装飾須恵器などとの比較研究の一助となれば幸いである。

II 異形土器の分類

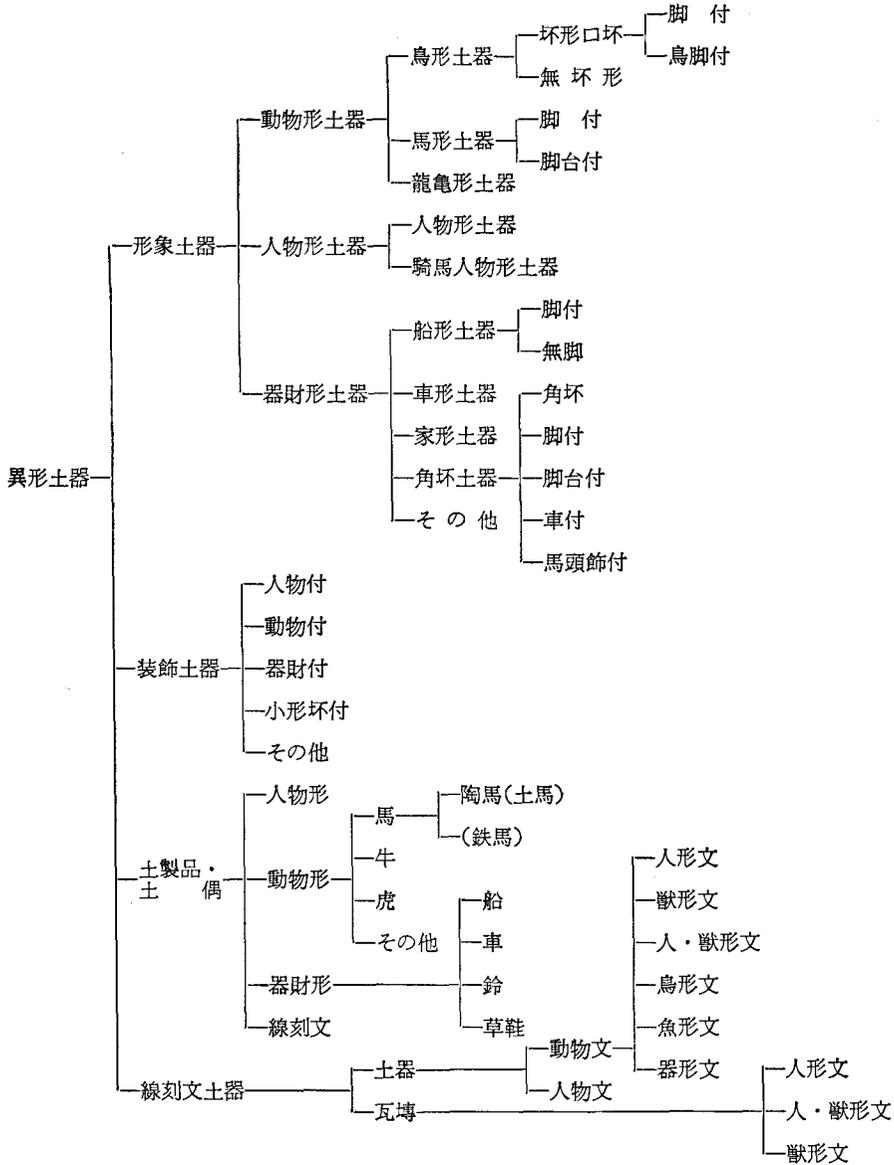
「異形土器」という名称の由来については明らかでないが、かなり古くから使用されてきており、今日ほぼ定着したものとなっている⁽²⁾。異形土器とは文字どおり、壺・甕など日常的な土器と形態的に異なるものを称し、ほぼ三国時代を中心に製作された土器をいう。本稿で対象とする異形土器は表1のようである。そのうち器財形土器・装飾土器の「その他」に含めうる鈴付土器・坏付扁瓶・小形土器等は扱っていない。

こうした異形土器については、はやくも柴田常恵1908において、鳥形土器が紹介されている。その後『朝鮮古蹟図譜』3 (1916) には、「陶製鞍馬」「人物及琴」が掲載され、「比等は或は支那墳墓の明器に倣ひし者か、一種の副葬品にして殉葬の意を寓せし者ならん」と解説されている。また同図譜には、装飾付罌・人形文長頸罌・絵画文土器・双鹿付甕もあわせて収録されている。図譜などの発刊もあって、1927年前後から類品がかなり知られるようになったという(梅原末治 1931・33)。1917年度古蹟調査では、咸安34号墳の発掘がおこなわれ、鳥形土器と車形土器が出土し、「欽器」あるいは「明器」という推定がなされた(今西龍 1920)。なお注目すべきことに今西龍 1908では線刻文土器の意匠を文献史料から解釈する必要性が説かれている。咸安34号墳につづいて、1924年の慶州金鈴塚の発掘によって騎馬人物形土器2体、船形土器2体が出土した。報告書では「意匠形土器」と称され、その発生源流についてや、中国の陶俑との関係の解明など示唆ふかい問題提起がなされている(梅原 1931・32)。

浜田耕作1926では、金鈴塚の出土資料とともに「装飾附陶器」に注目されている。「珍奇なる意匠形式を有する器 (fancy-form vases)」あるいは「異形の土器等」は、「全く朝鮮独自の発達と見る可きであろう」と指摘され、新羅焼の装飾を、平面的な装飾の「刻印紋様」・「篋描き絵画」、立体的な装飾の「彫刻的形像」「装飾的附加物」に分類され、「古代新羅人の美術的意匠、風俗史等に関する最も有益なる資料」「かの支那古代の明器泥象の如く、また希臘のタナグラ」のように位置づけられた。

1940年代には、『朝鮮考古図録』第1冊として『白神壽吉氏蒐集考古品図録』(1941年)、第2冊として『杉原長太郎氏蒐集品図録』(1944年)が刊行された。いずれも鳥

表1 異形土器の分類



形土器や家形土器の異形土器を含んでいる。なおこれら日本人による蒐集資料は、前者が国立博物館、後者が慶北大学校博物館において所蔵・保管されている点に留意したい。

1955年刊の『世界陶磁全集』は、1945年以前の朝鮮考古学の土器研究の到達点を示したものであった。その有光教—1955「新羅焼の変遷」では「群像裝飾高坏」「動物裝飾蓋」「騎馬人物形容器」などをあげ、「これ等の形象は当時の習俗を知るのに貴重

II 異形土器の分類

な資料である」と述べられている。その後金元龍 1960『新羅土器の研究』では、「土偶には二つの中心地があったようであり、一つは咸安一昌寧派、他の一つは慶州皇南派といえる。咸安一昌寧土偶は、土偶でありながら 容器的な 性格を かねそなえており、その彫刻は原始的であり、自然主義的であり、慶州金鈴塚の騎馬形器はこうした咸安一昌寧派の影響の発露といえることができる」。「慶州皇南派は疎略であり、簡潔に描出した小土偶を代表として、その彫刻的技術は咸安一昌寧派とことなるが、小土偶に生命力がみられる」と端的に指摘されている。1960年代になると、ヘンダーソン蒐集品（金載元1962）などが公表されたほか、各種の異形土器・土偶の知見もえられるようになった。いずれも出土遺跡・地域の不明なものも多く、資料的価値は必ずしも高くはないが、各土器の分布地域がおぼろげながら明らかになったり、各土器の性格について個別的に解明されるようになったといえる。これらの資料集成をおこなったのが、李殷昌1970「伽耶地域土器の研究」、李殷昌1972「土器」（『韓国の考古学』）である。また韓国中央博物館 1971『湖巖蒐集韓国美術特別展』図録、慶州博物館 1973『国立慶州博物館名品選』、扶余博物館1977『扶余博物館陳列品図鑑—先史・百済文化—』、東京国立博物館1982『寄贈小倉コレクション目録』、慶北大学校・崇田大学校・嶺南大学校などの大学博物館図録、梨花女子大学校博物館1978『明器と墓誌』の特別展図録などの公刊によって新資料も収録・公開された。また『韓国美術全集』（1973）、『世界陶磁全集』（1979）、などの美術全集によって最新の遺物も知られるようになった。そのなかで李蘭暎1976『新羅の土偶』は特筆すべきであろう。

これらの資料をもとにした一連の研究は、金元龍1960A・60B・62・70A・70B・73・78・79・81A・81B・84、李殷昌1970・72・74・77・78A・78B・80・83を中心に進められてきたといって過言ではない。その詳細については後述することにした。

1 形象土器

この形象土器の最大の特徴は、坏形口が付くとともに、「器」としての機能を有することである。形象容器と呼称した方がふさわしいかもしれない。事実「容器」と称されている（有光教—1955）。鳥・馬・龍亀形土器には、ほぼ背に坏形口がつき、騎馬人物形土器もほぼ同様である。船形土器では、船自体が容器的な性質をもつのでおのずと省略されている。車形土器には坏形口のかわりに小形の坏や角坏がともなう。家形土器にも、本来の形状とは全く別個に屋根などに坏形口が付着させられているのである。角坏形土器には坏形口は付加されていない。それは船形土器と同様、角坏自体が容器であるからである。この「坏形口」をもつ容器は、西アジアや中国にも分布

し、その系譜関係を考えるうえで示唆的である。

(1) 鳥形土器 (図版1・2・3)

現在30余個体が確認される⁽³⁾。博物館で展示されている未発表資料も多い。鳥は形態的な特徴から、雁・鴨系統に属することはうたがいない。鴨形土器と呼ばれることもあるが、雁も含まれるので、鳥形土器と総称しておく⁽⁴⁾。

鳥の本体にも若干の表現上の差違がみられるが、脚部の形状に着目して形態分類をおこなえば、A・B・Cの3類に、Aをさらに3区分することができる。

A-1類は、長形状の1段透しをもつもので、脚端がひろがり、脚端部に凸帯の施されたものである⁽¹⁹⁾。

A-2類は、脚端がひろがり、円孔の透孔のあるものである⁽³⁾。

A-3類は、脚端がひろがり、無孔のものである⁽⁴⁾。

B類は、1段透しで、脚端部は丸味をもつ^(7・8・16・17・12・15・13・14)。なかに鳥の足を具体的に表現したもの^(7・8)がある。②は全くの復原である。

C類は、2段交互透しのもの^(20・21)である。

これらは、土器の型式からみて、A・B類は伽耶系の土器であり、主として洛東江の西岸地域に分布する。B類は、伽耶・新羅の地域に共通して分布する。C類は主に洛東江流域でも東岸地帯の新羅領域内から出土し、洛東江の西岸でも昌寧など新羅の影響下のつよい諸地域に分布する。金元龍1960で指摘された洛東江東岸地域の高坏の特徴に相通ずるものである。

出土地域・出土年月の不明なものが多いことは前述のとおりであるが、いちおう慶尚北道慶州・玄風・昌寧・高靈・金陵、慶尚南道陝川などと伝えられている。器形的特徴からあえて推測すると、⑩は高靈地域で通常みられない形態であるし、伝昌寧の⑨はむしろ高靈地域などの伽耶系土器である。2段透孔の脚部でも、図版8-6のような鳥船形土器は洛東江の西岸地域で出土しても問題のない土器であろう。このうち咸安34号墳例は唯一の古墳出土資料であり、車付角坏土器と伴出している。古墳の年代は、5世紀中葉～後半に比定されるので、鳥形土器の時期の一端をかいまみることができる。なお⑤は、脚部の形状から5世紀前葉にまでさかのぼりうる可能性があるだろう。④は、脚部に円孔のある伽耶系の土器であり、背に長方形の孔と坏形口を合わせもつ点の特異である。これも5世紀代のものであろう。C類の2段透し脚部は、5世紀後半以後に出現するものであり、形態のうえで7世紀以降の新羅末期から統一新羅の高坏とは異なっている。6世紀前半を中心とする時期のものであろう。

II 異形土器の分類

表2 三国時代古墳出土の穀物・動物の遺骸

	遺 跡	穀 物	動 物
1	慶尚北道慶州市慶州16号墳	炭化米	
2	" 98号墳南墳	稻粃	
3	" 109号墳第2柳	穀物?	魚骨(スズキの椎骨), 鳥骨 (肋骨)
4	" 126号墳(飾履塚)	炭化米	
5	" 127号墳(金鈴塚)		鮑貝
6	" 128号墳(金冠塚)		動物爪
7	" 138号墳	穀粒	鶏骨
8	" 155号墳(天馬塚)		鶏卵
9	" 味鄒王陵第4地区3号墳1柳	稻	
10	第6地区神龜塚		石花・貝殻・魚骨・鶏骨 魚骨・鶏骨
11	" 4号墳主柳 副柳	稻粒 稻粒	
12	" 8号墳		貝殻・魚骨片
13	" 1号墳		貝殻・魚骨
14	第7地区8号墳(甕棺)		魚骨
15	第9地区A号墳1・2・3柳	稻	小貝殻・魚骨
16	第1～3地区古墳群	稗	
17	" 高靈郡池山洞34SE-3号墓		魚骨(たら他45), 鳥骨3, 蝸蚌2
18	" 34・35号墳連結石柳		魚骨, 貝
19	" 35NW-2号墓		貝(さざえ)
20	" 44号墳(1・6・11・ 16・25・32号墓)		魚骨 鶏骨55
21	" 45号墳(2・6号墓)		馬歯10 鳥骨
22	" 主山東南山腹		貝殻
23	" 高靈出土		貝殻
24	" 大邱市達西古墳群		貝殻19
25	達西15号墳	稻	
26	不老洞2号墳		魚骨(脊椎骨), さめ?
27	漆谷郡仁同1号墳		魚骨
28	星山郡星山洞古墳	粃	
29	慶尚南道咸安郡咸安34号墳		淡水魚
30	釜山市五倫台13号墓	稗	
31	" 福泉洞10・11号墳		馬骨

備 考	文 献
<p>魚・鳥類は第2 槨内の有蓋高坏内で出土, 遺骸部近くの大形土器内に植物質穀状の腐蝕物, 魚類の鑑定は曾根広(東北帝大古生物教室)</p> <p>台付長頸壺内で出土。</p> <p>杏葉と鉄斧に付着して稲粒が出土。 有台蓋付長頸壺内で出土。 煙筒構造物内出土。</p> <p>高坏に盛った状態で出土。 護石外の壺内出土。 (旧称D地区1号墳), 積石内の構造物の壺内出土。</p>	<p>有光教—1933 文化財管理局1976 斎藤忠1937</p> <p>梅原末治1931・32 " 浜田耕作・梅原1924・27 金載元・金元龍1955 文化財管理局1975A 金宅圭・李殷昌1975 " " " " "</p>
<p>第3 槨の護石から90cmへだてて大甕片があり, 魚骨, 小貝殻はその上におかれた埴3点内から出土。</p> <p>石槨内で出土した副葬土器群内の3個の高坏のそれぞれから鳥骨, 魚骨, 蛸蚌が出土。 高坏⑥内から3個体の完全な小形魚類(魚種不明), 高坏⑥内から78個の巻貝</p> <p>コウライニゴイ(Hemiberbus labeo), 15個体の土器内で出土。 11・16・25・32号墓内では2羽以上の個体があり, 容器の体積から完全でないものを納める。 主石室の無施設内で出土。</p>	<p>尹世英1975</p> <p>鄭在鏞1975 金鍾徹1981, 楊洪準1981</p> <p>楊洪準1981</p> <p>楊洪準1979 毛麒喆1979</p>
<p>高坏内出土 高坏内出土</p> <p>床面中央部で土器とともに出土。 石室床面上の有蓋壺内出土。</p>	<p>朝鮮古蹟図譜3(780) "(795)</p> <p>斎藤1937 小泉頸夫・野守健1931 白甲鏞1966 白甲鏞1966 梅原1946 今西龍1920 金廷鶴・鄭澄元1973 鄭澄元・申敬澈1983</p>

II 異形土器の分類

ところで慶州天馬塚で出土した漆器・鳥形杯（図版3-26・27・28・29）は、鳥形土器の時期などを考えるうえで恰好の資料である。天馬塚は5世紀末から6世紀初に位置づけられるが、この時期に土器と同巧の漆製の鳥形杯が製作・副葬されていたのである。背にはやはり杯口が表現され、脚部も付くらしいことである。時期的に咸安34号墳よりは後出するので、漆器から土器への模倣ではなく、鳥形土器を模倣したものと推測される。また鴨であることはほぼうたがいのないところである。

また⑦と⑧、⑬と⑭、⑫と⑮、⑯と⑰、⑱と⑲というように、一対となる同巧品の例が少なくない。所蔵者も同一である場合が多く、取蔵に至った経緯も同様であったと推定せざるをえない。同一地域というより、むしろ同一遺跡（古墳）で出土したことを想起させる。この点については今後確実な出土資料をまわって問題にすべきであろう。鳥形土器ではないが、酷似する角杯付の馬形土器一対が福泉洞7号墳（金東鎬1983）で出土した例もあり、金鈴塚では若干形態の異なる一対の船形土器・騎馬人物形土器が出土していることも考慮すべきかもしれない。

以上のように、鳥形土器は洛東江流域を中心として分布し、伽耶・新羅地域に及んでいたことがわかる。地域差が顕著で、とくに脚部の形態が洛東江流域の各地の土器型式を踏襲していることが明らかである。

鳥の種類については、鴨と認識されるものが多いが、首の長い大形のものは雁であろう。鴨や雁には多種が存在する。『日本鳥類大図鑑』II（清棲幸保1978）によれば、洛東江流域の慶尚南北道に飛来する雁鴨には、マガン（*Anser albifrons albifrons*）、カンムリツクシガモ（*Pseudotadorna cristata*）、コガモ（*Anas crecca crecca*）がある。とくにカンムリツクシガモは慶尚南道釜山洛東江と忠清南道・全羅南道の境界の錦江で2羽、ウラジオストクで1羽が銃獲されただけの世界的珍鳥であり、東部シベリアのある地方で繁殖し、冬季は朝鮮、日本、中国などに渡るのであろうと推定されている。自然条件からみて、往時は、今日よりも繁殖していたのであろう。鳥形土器のうち属までの同定は困難であるが、渡り鳥としての鴨や雁が表現されていることは認められよう⁽⁵⁾。なかには嘴が扁平なものや、「とさか」状のつくもの（図版3-1）があり、鶏やその他の鳥を模倣したようなものもあったのであろう。天馬塚では、「鳥形杯」7（図版3-27・28）、「鴨形杯」（図版3-29）8個体の漆器が出土している。前者は「杯身的一端に鳥首形を立体的に彫刻しており、その反対側を尾形に作った漆杯」で、いわゆる身は船形を呈する。「全体を丸彫にして削って作り、漆は木地に直接塗っている」。注目すべきは「杯の底面には木製の四角いほぞをつけている」ことであり、「元来は台足のついている鳥形杯」（図版3-26）であったと推定されている。こ

の鳥形漆器は、鳥船形土器や鳥形土製品と類似する。また「鴨形坏」の器底にも木製のほぞが嵌まっているという。その一は背に坏形の付くもので、鴨であろう。そのほか細頸で胴部の細い、あたかも雁のような鳥形品がみられるのである。

鳥骨は、表2のように8基の古墳で出土している。そのうち鶏骨と同定されたものが4基の古墳で出土している。高霊池山洞44号墳では、1・6・11・16・25・32号石槨というように多数出土し、いずれも副葬された土器内で検出されている。「完形の鶏」でなく、破片が多数出土した11号石槨例のように、ばらばらに置かれたようである。「骨片などの推想図を作成し、その原形を推理した結果、現存在来種の鶏と大同小異で、明らかな特徴は発見できなかった」という。遺骸の腐蝕も甚だしく、品種・性別の判定も不可能であったらしい。しかし興味ぶかいことに、10・16・25号石槨の遺骸には各々2羽以上の個体を入れ、容器の体積からみて完全なものを入れたのではないと推定されている。「鶏は飛揚力が劣等ではあるが、当時家畜として飼育されていたので、たやすく求めることができ」たのであろう。また鶏は当時もっとも大きい羽をもつ鳥であったので「以大鳥羽送死」の記事と付合するという（毛猷喆 1979）。池山洞45号墳第2槨内では、壺におさめられた鶏骨1体分、第6号石槨出土の有蓋高坏内で約半分の鶏骨が出土した。前者の出土状況をみると、折り重ねたような形で充填されていたという。骨化したもの、つまり骨だけを充填したかのようである。肉の付着した状態で納めたものではないであろう。被葬者への副葬に際し、副葬品の一つとして鶏骨を壺や高坏に納めて置いたものと解釈せざるをえない。埋葬（葬送）儀礼において、鶏を殺害し、その骨を供献したのであろうか。そのほか種別の不明な鳥骨もあるが、雁や鴨とは同定しえないようである。小鳥の類は遺存率も低く、種・属の同定は困難であろうが、鶏（鶏骨肉）の副葬・供献の事実は否定しがたい。古墳における鳥・鶏類の普遍的な副葬、鶏卵の副葬装飾土器に付加された鳥、鶏形土製品の存在など鶏祭祀実修の解明の意義は大きい。

先述のように、今日のところ古墳出土の確実な鳥形土器は咸安34号墳がいにならない。そこでは、石室内で車付角坏土器に接して出土した。石室のやや奥壁側から、土器群中で出土している。ただ土器群のなかでは遺骸にもっとも近い。天馬塚では、漆製の鳥形・鴨形坏が積石木槨内の副葬品収蔵櫃内で出土し、その東北隅近くで、一辺40cmほどの方形の範囲内に、鳥形坏・鴨形坏・角坏・高坏・蓋などの小形漆器40余点が重なりあって出土したという。これなどは明器としての性格がつよい。

これらの新羅・伽耶の古墳における出土状況をみると、鳥形土器・鳥形漆器は副葬品として、明器として供献されていたようである。咸安34号墳では鳥骨も伴出し、天

II 異形土器の分類

馬塚では鶏卵が供献副葬されていたことを付記しておく。

以上のように、新羅・伽耶の地域において、鳥形土器とりわけ鴨形土器、鳥・鴨形漆器が副葬され、鳥骨・鶏骨が供献されるかたちで副葬された事実が存在した。

つぎに、鳥形土器・鳥骨の副葬の意義を考えるまえに、無文土器時代いろいろの鳥に関する資料を検討しておくことにしたい。

① 青銅製双鳥竿頭飾（金元龍1973）

高さ12.5cmで、慶州出土と伝える。「鳥形は余りに小さく」、「棒や長竿に差し込まれたものとは思われず、短い竿や杖などにつけられた飾りではなかったか」（金元龍1973）と推測されている。

② 農耕文青銅器

伝忠清南道太田。一面には、二つに分岐した枝に止まる2羽の鳥が表現され、中央の雷文風の文様をへだてて1対の鳥杆が表象されている。下半部の文様は破損のため全体が明らかでないが、相対する2羽の鳥は生き生きと描出されている。他の一面には踏鋤を用いる農夫と長柄の鎌で収穫する人物の姿が表わされている。この踏鋤を用いる農夫には男根が表現されている。この鳥は「神を招く鳥」であり、春耕・秋収の祭祀において、大木に懸垂する儀器と想定され、その情景は三国志魏志東夷伝馬韓条の「蘇塗」に関する記録と一致することが指摘されている（韓炳三1979）。

③ 銅製鳥形剣把頭飾

銅剣の柄頭に飾られた2羽の鳥である。鴨か雁かが写實的に表現されている。

④ 銅製鳥形剣把頭飾

慶尚北道大邱飛山洞出土。「鳥の胴体は空洞であるが、首と頭が写實的に美しく、それは家鴨ではなく白鳥であることを物語っている」（金元龍1973）。このいわゆる鳥形アンテナ式銅把は、「最も先行する様式である写實的型式が韓国に局限されている事実」（金元龍1970A）があり、そこで鑄造されたことはまずうたがない。

⑤ 鳥形把手

これは、慶尚南道熊川貝塚で出土したものである。「牛角形の把手のさきを折り曲げて、あひるの頭に似せて作った金海土器の把手」であり、「洛東江下流伽耶地区で発見された三国時代鴨形土器の先駆的な存在」といえる（金元龍1973）。

⑥ 金製鳥飾

慶州瑞鳳塚から出土した冠帽の飾りである。三枝の金帯の端部にそれぞれ1羽の鳥を付着させている。従来この鳥は「鳳凰」または「鳳凰形」と考えられてきたが、「三羽の鳥はすなわち金冠塚金冠または新羅と伽耶領域で発見されたいくつかの金銅

冠の内冠にみえる鳥翼形の形態のもつ意味と同系列に属する呪術的な意味で付いたものと考えられる」(秦弘燮1976)。さらに農耕文青銅器の鳥杆とも比較されている。鳥杆・蘇塗は原三国時代いらい、今日まで続く風習ととらえることができよう。

⑦ 鳥飾付青銅錐斗 (国立中央博1964)

慶州瑞鳳塚の出土である。羊形の注口に獸脚の三足がつく。蓋の中央に棒に止まる状態の鳥を鋳出している。これは鳳凰を表現したものであるかもしれない。

⑧ 水禽裝飾付高坏 (榎本杜人1955)

裝飾土器に属するものであるが、次の⑨とともにここでも取り扱っておく。慶尚北道開慶出土と伝える。高さは18.6cm。無蓋の高坏の口縁端に2羽の水鳥が付着され、また四方に心葉形の垂飾が施されている(図版13-2)。

⑨ 水禽裝飾把手付高坏 (榎本杜人1955)

高坏の坏部の中央に1羽の鳥を配する。先述のように高坏におさめる鳥(骨)の模倣としての土製品であるとすれば興味ぶかい。裝飾土器の類で、坏内に加飾した唯一の例品である(図版13-1)。把手のつく無蓋高坏で、典型的な伽耶土器であり、この種の鳥付裝飾土器が洛東江流域に分布するのであろう。新羅の鳥形土器・裝飾土器とは異なる。なお図版8-6は、坏部が船形となり、先端に鳥の付く形態であるので、この類に含めてさしつかえない。

⑩ 鳥船形土製品

裝飾土器の本体から剥がれたとみられる鳥形土製品とは異なる、やや大形で鳥船形のものがある。図版13-7は鳥形と反対側に飲口のつくられた容器である。天馬塚の鳥形漆器と脈絡があろう。このほかにも裝飾土器に施された鳥形土偶や、単独の土製品がある(図版13-8・9・10)。

また鳥の描かれた絵画文資料もみられるが、鳥の表象された遺物の主なものは以上のようなものである。

鴨形土器が副葬されたのは、魏志東夷伝弁辰条にみえる「大鳥の羽根を用いて死者を送るが、それは死者を〔天上に〕飛揚させたいからである」(『東アジア民族史』1)ということであろう。つまり、鴨あるいは水鳥形土器は、死者の昇天にかかわり、使用されたのではないかと推定されている(金元龍1979・81)。また「鴨は古代の鴨緑江とか洛東江に群棲しており、古代人の主要な食糧源の一つであったにちがいない。そういうところから鴨は死者に対する供物、いわば古代人の重要な狩猟対象として象徴的存在になり、明器として副葬されたのかもしれない」とも推測されている(金元龍

II 異形土器の分類

1979)⁽⁶⁾。現時点で、鳥形土器は洛東江流域を中心として出土し、鳥形漆器は慶州においてのみ出土しているのであるが、前述のように出土地不明の鳥形土器のなかに、明らかに新羅土器の型式を踏襲するものがある。したがって新羅・伽耶の両地域にわたって地域差をもちながら分布するものといえよう。

咸安34号墳の出土状況から、つまり副葬品であるという意味において葬送儀礼にかかわり、死者の靈魂の運搬・引導という呪術的性格が付与されていたことは推定できよう。そのいっぽう鶏・鴨が大半を占めるようであるが、高坏などにおさめて鳥(骨)を供献した事例は多い。それは食物供献と同時に人間靈魂を来世に運ぶ鳥という意味をもっていたからにちがいない。鳥は、神・祭場とシャーマンの間で靈媒の役割を果たしたのであり、「人間が死んで、来世にゆく過程の過度的な再生体としての役割をもつ」(河孝吉1979)ものであった。

また鳥杆としての鳥に関しては、鳥形土器よりもむしろ農耕文青銅器が好資料となろう。鳥杆自体の用途が埋葬・葬送儀礼と結合していない点は重要である。韓炳三1971では、「鳥杆に対する信仰は、元來祖靈の媒介体としての鳥に対する崇拜思想であっただろうが、のちに長生と結合して、保護神のような役割をはたすようになった」と指摘されている。したがって鳥杆はあくまで村祭的、公的呪術的な様相がつよかったのであろう。空間的には、集落間の祭祀であるといえよう。

(2) 馬形土器

馬形土器には、馬形容器、馬形土製品、騎馬人物形土器(容器)、騎馬人物形土製品に大別される。また陶馬(土馬)・鉄馬・木馬・青銅馬というように材質による相違もあるが、ここでは三国時代から統一新羅時代の資料である陶馬と鉄馬のみを取り扱うことにする。

① 騎馬人物形土器(金鈴塚出土)(図版4-1)

盛装した人物の乗る騎馬像である。尻繫・杏葉・鏡・障泥・鈴・鞍などの馬具が表現されている。特異なのは両耳の間から彎曲気味に垂れ下がる「総状の突起飾り」(梅原1922)である。この前髪飾りは、慶尚北道大邱解顔面2号墳出土の高坏の蓋部に線刻された馬形文を想起させる。また青銅器時代のラッパ状銅器とも脈絡がある。尻繫部に環形口が付き、胸繫部から注口のつくことはまさに容器であることをものがたる。次にふれる騎馬人物形土器とともに、木槨内の東側、東枕の被葬者の頭部側で、他の副葬品とともに出土している。馬具・土器類が多く、船形土器・手持高坏形土器などの異形土器とも伴出する。騎馬人物形土器は2体が並列し転倒して出土しているが、

本来は立てられた状態で並置されていたのであろう。

② 騎馬人物形土器（金鈴塚出土）（図版4-2）

馬自体の表現は①と大差ない。ただ人物像の表現は、冠帽・服飾・持物などの点において差違がみられる。「三角帽をかぶって、鹿皮を袴にかぶせた」①は、「古新羅の貴族の扮装であり、丁髷のような帽子をかぶり、右手に木鐸をもっている方は、露払いの家来である。おもちゃ人形のような印象であるが、中空身・坏状口は特殊儀器としての動物形土器の公式を守っており、被葬者の昇天を祈った呪術的機能の儀器である」（金元龍1979）という。①②も長方形の台上に造作されている。

③ 騎馬人物形土製品（出土地不詳）（図版4-3）

胸繫・面繫・鞍・鐙が表現されている。人物は高頂巾をかぶる。窄袖肢体形の服装は特徴的である（秦弘燮1974・李殷昌1980B）。

④ 騎馬人物形土製品（出土地不詳）（図版4-4）

面繫・胸繫・尻繫のほか、輪鐙・障泥が巧みに表現されている。左腰から左足にかけて吊り下げられた比較的大形の皮袋状のものもみえる。

⑤ 騎馬人物形土製品（出土地不詳）（図版6-6）

疾走する馬を描いたことは、騎上の人物の姿からうかがえる。高さ4.0cmの小形品であり、装飾土器から剝離したものであろう。

⑥ 騎馬人物形土器（出土地不詳）（図版6-4）

脚台上に騎馬人物像が造形されている。脚部に2段の突帯が施され、長楕円形状（菱形）の透孔を穿っている。伽耶式特有の形態をそなえている。脚には長方形状の、中央に円孔のある台部がつく。馬は、いわゆる鎧馬である。馬甲は長方形の格子まで表現され、纓飾も先端は欠けるが、写實的に表現されている。馬面の有無については定かでない。人物像は左手に盾、右手に槍をもち、短甲で装備している。馬甲は双楹塚や鎧馬塚などの高句麗壁画のものと同類することはいうまでもない。尻部に角坏状の双坏がつけられている。坏形にかわるものといえようが、角坏形である点が特異である。この騎馬人物形土器は、脚部の形から洛東江流域の伽耶土器であることはうたがいのないところであったが、出土地の不明なことから、資料的価値が半減していた。ところが1983年秋に、奈良県橿原市南山4号墳において伽耶系土器の脚台部と坏部の破片が出土したのである（図版6-1）。完形でないのが惜しまれるが、部分的には同巧品といってよいものであった。古墳は円形の大形墳であり、墳頂部から子持環状瓶などとともに出土した。その墳頂下の主体部は削平等のため明らかでなかったという。主体部の東南方で副室が存在し、鉄鋌・鉄鏃などが出土している（阪口俊幸1984）。

II 異形土器の分類

この資料によって、韓国における角坏付騎馬人物形土器、角坏付鹿形土器などが墳墓の出土資料である蓋然性が高まったといえる。

⑦ 騎馬人物形土器（出土地不詳）（図版6-3）

1983年になってはじめて報告された資料である。⑥と全体的に類似する。脚台部には円孔はみられない、脚の最上段に円形の透孔があることなど、伽耶土器系の形状を呈する。馬甲はやはり線刻文によって表現されている。馬面はみられない。纓飾は完存し、前方に垂れ下がる。人物は短甲を装着する。頭部は欠損する。尻部に双坏がつけられ、各坏には2帯の斜格子文が線刻されている。焼成は堅微である。⑥と色調は異なるが、製作地は同一であろう（東博他1983）。

⑧ 馬形土器（出土地不詳）（図版5-2）

「両腹部には点線で、網目文様を施文し、灰黄色の素地に黒褐色の自然釉が全面をおおっている」（国立博1971）。釉色・胎土から伽耶土器と推定されている。四脚の下に長方形の台座がつくられている。一部は復元であるかもしれない。

⑨ 馬形土器（伝慶尚北道達城郡玄風）（図版5-1）

裸馬でなく、馬装されたものである。面繫をつけ、尻繫には雲珠・杏葉、鐙・鞍も表現され、とくに馬鐙は5～6世紀代の形態をよくとどめている。坏形口⑧と同様鞍の上部につくられている。これにも長方形の台座がつく。

⑩ 馬形土器（出土地不明）（図版5-7）

灰黄色の素地にうすい黒褐色の自然釉がまばらにかかっている。面繫・胸繫・尻繫、障泥および輪鐙が表現されている。鞍部に孔がみえる。1段透孔の脚部がつく。

⑪ 馬形土器（伝慶尚南道昌寧出土）（図版4-5）

1段透しの脚部がつく。また尻部に坏形口がつくられている。馬装備は、面繫・鞍・障泥・尻繫の一部のみである。鐙は表現されていない。両耳の間には、前髪飾りの痕跡をとどめている。障泥の一部は復元されている。

⑫ 馬形土器（出土地不詳）（図版4-7）

『韓国文化』1981年2月号に掲載されたものである（李蘭暎1983）。高坏の脚部に台座のつく脚台部上に、角坏を背に負う馬が造形されている。馬は面繫・胸繫・鞍を装備する。障泥には鋸歯文が施されている。鞍に先端が渦文状になった角坏が取りつく。脚部には、2段にわたり三角形状の透孔が穿たれており、いかにも伽耶系の高坏をほうふつさせる。出土遺跡・発見の経緯については明らかでないが、前述の騎馬人物形土器と同種のものであり、洛東江流域の伽耶における出土品であることは確かであろう。

⑬ その他

上記がいの、馬形土器がいくつか知られている。『古代土偶 わが第二の人生谷村敬介コレクション』(1980・9)に掲載されているものや、扶余地域出土のものである(扶余博1974)。いずれも丸胴で、中空の馬形容器である(図版5—10・12)。また『古蹟図譜』3所収の馬形土器は、稚拙ながら鞍・面繫を有し、長方形の台座をもつ。これに脚がつくのか明らかでないが、稀少な例としてあげておく。

以上の馬形土器についても、鳥形土器で検討したように、脚部の形状によっていくつかに分類できる。先述のように、高環形の脚のもの(A類)と、長方形の台座の付くもの(B類)、脚台部の付くもの(C類)、まったく無脚で馬の四足で直接支えるもの(D類)がある。台座の付く典型例は、金鈴塚出土例で、時期も5世紀末から6世紀初頭に比定できる。また脚台部の付くC類は、南山第4号墳の年代が5世紀中葉頃に比定できるので、それ以前に成立していた器形といえよう。その他の資料については、年代等の推定の根拠が稀薄である。それでひとまず型式学的に仮定すれば、台座と脚部が結合して脚台部となったのか、逆に脚台部が台座のものと脚部のものに分化したかいずれかが想定される。前者の場合ならば、5世紀前半に台座型式と脚型式のものが存在したと考えねばならないだろう。鳥形土器であれば、5世紀前半にさかのぼりうる脚部が存在しえたが、脚付の馬形土器には伽耶的要素は認めがたい。後者の場合の方が可能性がよい。脚部の形態が新羅的な高環にちかく、伝昌寧・玄風の馬形土器もおそらく新羅の影響のつよまった5世紀後半以降のものと思われる。もちろん環形口と角環という差違もあり、いちがいに言えないかもしれないが、そうした想定もおこなっておきたい。台座が新羅的、脚台付馬形土器が伽耶的であることは興味ぶかい。

台座を用いる造形法について、視野をひろげてみると、中国のいわゆる土偶、陶俑において、台座上に作られるものが多い点が指摘される。六朝以降の所産である。とくに台座を用いた造形法は、六朝のなかでも北朝の北魏などの間接的な影響があるように思われる。現時点で百済にそうした土器がなく、新羅や伽耶に顕著であることは示唆的である。したがって高句麗においても今後、出土の予想される遺物である。

ところで馬形土器と角環との関係で注目されるのが、釜山福泉洞7号墳で出土した「馬頭飾角環」であろう(金東鎬1984)(図版5—4・5)。この馬頭角環については、これまで美術全集などで知られていた資料であったが、1984年に報告書が刊行された結果、それらが竪穴式石室内の一隅で並列して出土したことが判明した。馬頭角環は、角環の一端に馬頭を彫刻し、脚をつけたものである。伴出の土器や馬具から5世紀後

Ⅱ 異形土器の分類

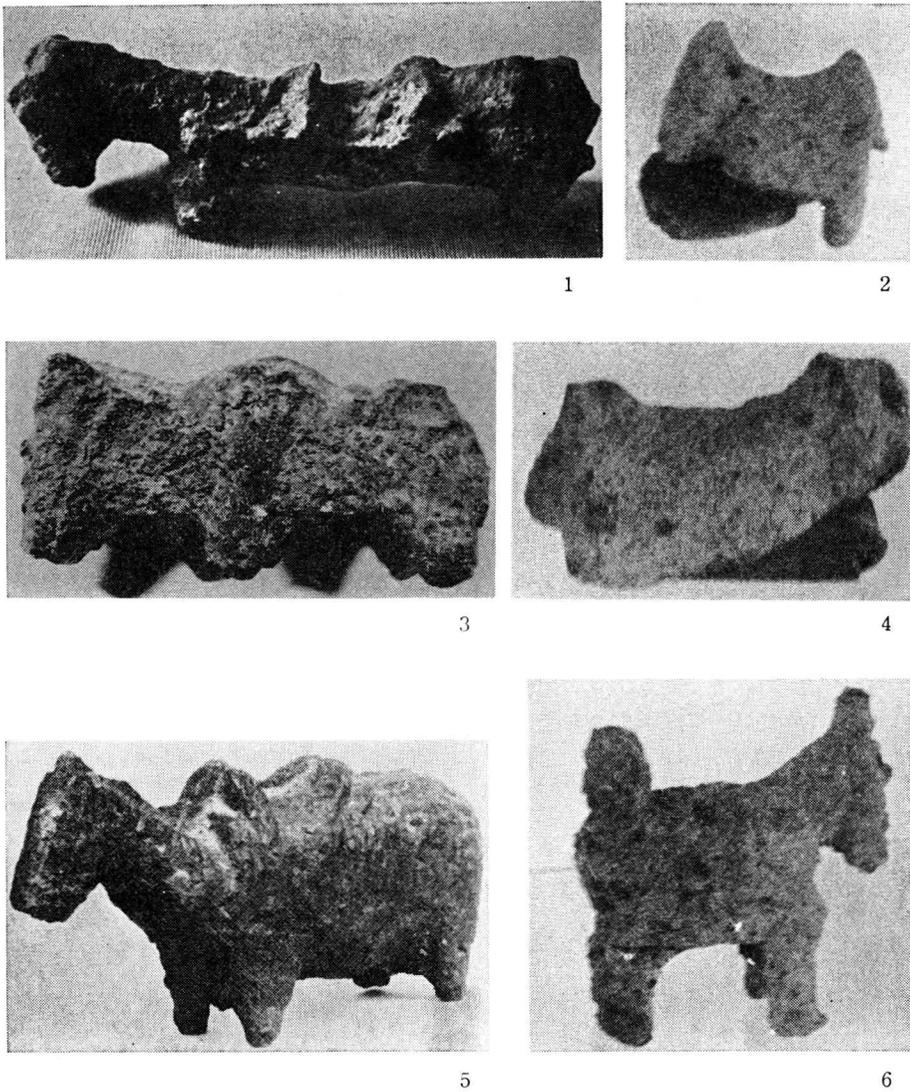


図1 鉄馬

1 慶州雁鴨池 2・4 伝慶尚南道高靈 3 伝慶州 5・6 出土地不詳

半ごろに位置づけられる。このほか出土地不明であるが、類例がある（梨大博1978，東博1982）（図版6－5）。これからはきわめて新羅的な作品であると考えられる。なお福泉洞古墳群については，釜山大学校博物館によっても発掘されており，その古墳号数とは異なる。

角坏を有する脚台付馬形土器に類似し，馬のかわりに猪・鹿を造形したものがある。脚台付猪形土器（図版6－2）は「猪台角坏」と呼ばれたもので，脚部には円孔が穿たれている。熊である可能性もあるという（金廷鶴1979）。脚部の形状は伽耶系であり，

角坏部に2帯の斜格子文が施されている点、さきの馬形土器に似る。脚台角坏付鹿形土器(図版6-4)は、“Treasures from Korea art through 5000 years”に掲載され、“Horn-shaped cup with deer”と称されている。高さは24.4cmで、伽耶時代のものであるという。これらの馬・猪・鹿そして騎馬人物像という伽耶土器の特色をもつ土器5例が知見にのぼるようになり、南山4号墳例を含めると6例となる。いずれも脚台部の特徴が一致する。洛東江西岸地帯の伽耶の地で製作されたものであろう。

ついで陶馬・鉄馬についてふれておく。

先述の馬形土器などと明らかに異質な土製の馬が、慶尚南道金海郡府院洞遺跡で出土している(東亜大博1981)。いわゆる土馬は4体で、いずれも赤褐色硬質土器である。①は高さ5.4cmで、頭部・尾の一部が欠損する(図版5-8)。②は6.8cmで、頭部・尾部・脚の一部が破損している。特徴的なのは、臀部から頭部にかけて1.0~0.3cmの管状の孔が穿たれていることである。③は頭部のみ破片で、約3.0cmである。④も頭部の破片で、口を大きく開く。頭部の長さは約5.0cmであるので、かなり大形のものに復原しうる。時期は三国時代の5世紀以降で、下限については定かでない。これらの土馬はすでにわが国に紹介されている(大竹弘之1982)とおり、時期的な問題は残るが、わが国の土馬と近似することは確かである。また地域的な近似関係や系譜関係の検討も要するであろう。対比すべきは、土師質の土馬でなく、須恵質の土馬(陶馬)であろう。とりわけ福岡県京都郡向野窯跡の灰原内で出土した須恵質の馬は6世紀後半までさかのぼりうる事が明らかになっている(小田富士雄1971)。それゆえ三国時代における陶馬もさらに遡及して出土する可能性があろう。

従来、韓国における陶馬(土馬)については、その存在自体は認識されていたようであるが、まとまった報告もなく、その実態は究明されていなかった。筆者の知見にのぼったものもあまりにも断片的であるが、この際ふれておくことにしたい。

①(図版5-9)は京大蔵品で、韓国の出土品と考えられるものである。硬質の胎土で、黒褐色を呈する。細身の姿態を呈し、両眼は円形浮文が貼りつけられている。背にはやや色調の異なる部分があるが、鞍の剝がれた痕跡と推定される。②(図版5-10)も京大蔵品である。色調は①と酷似する。面繫・尻繫・鞍部も表現されている。いずれも粘土をこね、貼り付けるようにして造形している。①②とも性器が表現されている。時期等は不明である。③は東博蔵品(旧小倉コレクション)である。全体のつくりは①②に奇妙なまで類似する。①②を韓国における出土品と認めたとゆえんもここにある。鞍および尻繫がつくられ、性器も表現されている。眼も円形浮文による。④も同じく東博蔵(旧小倉コレクション)である。暗青灰色を呈し、ややずんぐりし

Ⅱ 異形土器の分類

た胴部である。時期、出土地は不詳である。このほか啓明大学校博物館や釜山大学校博物館、東亜大学校博物館などで所蔵・展示されている資料がある。おそらく全国的に出土しているのであろう。ただ府院洞遺跡いがいは発掘資料でないので、今後注目されれば類品は続出するにちがいない。

上記の陶馬のほかに、青銅器時代の銅馬、おそらく高麗時代以降の銅馬（東博1982）・石馬がある。

さて鉄馬についても、韓国における大学博物館などでかなり収蔵されているようで、その存在についても自明のことであった。各地でかなり発見されているのであろう。しかしその時期や出土地域の不明なものが多く、さほど注目されることはなかったといえる。ところが、1975～76年の慶州雁鴨池の発掘において、鉄馬が出土したのである（図1—1）。その報告書によると、「M10区の砂泥層で出土した。頭部と四肢をもっており、背には鞍装が表現されている。奇妙に四肢が短く表わされているが、全体的な形態は馬の形像にちかい。背面はU字形に溝をつくっている。どのような用途で製作されたのかわからない。長さ12.5cm、高さ3.5cm」と記述されている（趙由典1978）。雁鴨池の築造年代から類推して、7世紀末から8世紀代の統一新羅期の遺物とみて大過ない。時期・出土遺構の明らかな鉄馬の資料として貴重である。

また伝平壤出土の鉄馬（東博1982）は、全長13.0cm、高さ9.8cmのものである。面繫・胸繫・尻繫などの装具を備えている。時期は不明であるが、李朝時代以降にくだる蓋然性がつよい。出土地未詳の鉄馬（東博1982）は、全長23.7cm、現高12.5cmを測る大形品である。鞍および障泥が表現されている。背に鑄張りをとどめ、鑄造品であることは明瞭である。

慶州出土と伝える鉄馬（新谷武夫1977）は、図1—3のように「左背部と右後脚部に若干の欠失がみられるものの、ほとんど完形品である。慶尚北道慶州地内出土と伝えられ、寺院跡から鉄製仏像とともに出土したというが、詳細は不明である。高さ5.1cm、長さ10.2cm、幅3.0cmを測る。鑄鉄製で、重さは492gである。……左側面には輪鏝らしきものも鑄出されている。……仏像は様式からみて、高麗時代のもので、そのことから鉄馬もその時代のもと考えられる」。高麗時代は約400年間におよぶが、その時期のものともみてさしつかえない。雁鴨池出土の鉄馬に若干類似することを付言しておきたい。このほか筆者が慶尚北道高靈郡池山洞の資料室（国民会館）で実見した3体の鉄馬がある。いずれも小形品である。資料室には、池山洞付近の出土品を中心に展示されていたので、鉄馬もすくなくとも高靈郡内で発見されたものであろう。

以上のわずかな資料であるが、統一新羅時代以降に鉄馬の製作されたことがうかが

える。いずれも鑄造品であるが、その以前の三国時代の新羅や伽耶において、鑄造技術の発達していたことは、鉄釜や鑄造斧形品が多量に製作されていたことから看取される(東1982)。鉄馬の意義については、興味ある民俗事例がある。「寺を建立するとき、寺域の四隅に鉄馬または陶馬を埋めたりするが、鉄馬が祀堂の神主となっているたぐいは、いずれも馬に対する信仰をものがたる」という(金元龍1978)。また忠清南道外烟鳥鎮村では鉄馬が部落の守護神として安置され、1年に1度全村民が集まり祝祭をとりおこなう事例がある(金元龍1978)。近・現代における祭祀であるが、鉄馬の性格を考えるうえで示唆的である。

ところで馬にかかわる遺物は、上述の馬形土器がいにも高句麗壁画など数多くみられるが、馬そのものの出土は従来知られていなかった。ところが1973~74年に慶州味郷王陵地区の整備事業の一環として発掘がおこなわれた際、馬骨が出土したのである。馬葬墓は神亀塚の1号墓の護石の付近で、直径220cmの円形の石囲いからなり、その中に屈葬された状態で出土した(李殷昌1975)。馬は小形で、現在済州島で飼養されている蒙古馬系統の在来馬に属するという。1号墓の外護列石を切って馬葬墓はつくられているので、1号墓の埋葬時期との時間的差違が問題となる。つまり隣接する7号墳にともなう可能性がある。なお1号墓から「神亀形土器」、7号墳からは角坏および角坏台が出土している。

味郷王陵前地区のD区では馬葬墓が2基発掘されている(李殷昌1975)。1基では長径260cm、短径210cmの楕円形の護石内に埋葬された状態で馬(骨)が出土している。またその西北隅で馬骨の一部が検出されたという。他の1基は径220cmの円形護石をめぐる構造で、歯列がそのまま遺存している。犠牲馬・殉葬馬であることは容易に推定できよう。神亀塚1号墓付近の馬墳の場合、馬1頭分の可能性があるらしいことは注目される。D地区の2基でも比較的大きな骨片と歯が出土しており、頭部のみの埋葬である可能性があるという。

高靈池山洞44号墳では、石槨(17・18・19号)の間に該当する空地で馬歯が出土している(尹容鎮1979)。馬歯は上下顎各5点ずつ出土し、形態や大きさから現存する在来種馬ほどの体躯と推定されている(毛麒喆1979)。池山洞44号墳は、5世紀末~6世紀頃と考えられるが、その時期馬葬が存在したといえる。この古墳では、歯のみの遺存であるが、ほぼ1頭分の埋葬が想定されるという。また石槨外で埋葬されている点も留意される。同時代のわが国においても、大阪府四条畷市の奈良井遺跡では方形周溝遺構内から1頭分の馬骨が出土している(土肥孝1983)。この馬は、体長1.5m、体高1.2mのモウコウマ系の小形種であり、時期は6世紀初めに比定されている。

Ⅱ 異形土器の分類

殺馬・殺牛の儀礼が、祈雨祭祀、水乞信仰、農耕儀礼的な側面をもつことはすでに指摘されているが、埋葬儀礼の過程で、殺馬の事例の存在することは興味ぶかい。馬葬墳は、慶州古墳群における従来の発掘では、味鄒王陵地区でのみ発掘されているにすぎないが、いずれもほぼ全掘された古墳である点が共通する。池山洞44号墳でも然りであった。したがって古墳祭祀の一環として、馬葬は普遍的であったかもしれない。馬形土器・馬形文土器の性格も問題となるが、馬葬と同時代・同時期の所産であるのである。三国志魏書韓伝の「〔人の屍を〕葬るには、〔遺体を納める〕棺はあるが、〔棺を納める〕槨はない。また牛馬に乗ることを知らない。牛馬は死体を運送することのみに使用している」(『東アジア民族史』1) という解釈でなく、「牛馬盡於送死」という記録は、埋葬儀礼において殺馬・殺牛のあったことを示すのであろう。

馬形土器の性格について、李殷昌 1980 は、馬形文(馬刻文)土器も含め、「被葬者の靈魂が神馬を乗せ、冥界(天界—光明界)にゆき、そこで生を継続するという継世思想」という観点で把握している。天馬塚における「天馬」は、『三国遺事』巻1の新羅始祖赫居世王条にみえるように、「神馬としての天界と地上を垂直に往来する馬」(李殷昌1980)である。こうした天馬と、馬形土器、馬形文土器そして馬葬など、すべて共通する思想のそれぞれの表現とみることができよう。高句麗壁画古墳である鎧馬塚では、「冢主着鎧馬之像」という墨書された飾馬が描かれている。しかもそこには墓主が描かれていないのであり、あえていえば墓主の靈魂を乗せ、冥界にゆく他界観が表象されているように思える。舞踊塚のばあい、墓主は表現されているが、従者を従え馬に乗り、冥界へ旅立ちする主人公が描かれているのであろう。

葬送儀礼における馬のもつ意味は測り知れない。陶馬・鉄馬というような時代のくだる遺物にしても、馬のもつ呪術的側面が継承されている。三国時代における、王権と農耕神とがふかくかわり、天候を支配する要素が付加されている。また三国史記には穀物災害・洪水・旱魃関係記事が少なくない(鏗方貞亮1968)。そうした災害にかかわる祭儀において、いかなるものが表象物になったか明らかでないが、馬はその可能性を秘めている。わが国において6世紀後半以降、雨乞儀礼に土馬が用いられていたことは認められ、白馬・黒馬の話も世界的な広がりをもつのである。三国時代・統一新羅時代から高麗時代にかけて、土馬(馬形土器)、そして鉄馬がつくられている事実は祭祀対象が同様であったことを示唆する。

今後、陶馬や鉄馬の出土例は増大するであろうが、府院洞遺跡のように古墳いがいの場で出土することが期待される。馬に関する祭儀は、民俗例からみて「家祭」的ではなく、「村祭」的性格を有するものといえよう。先述の鉄馬や慶尚南道固城郡の「石

馬」などもやはり村祭的である。鳥杆・長生・水殺竿など村の境界で実修される祭祀に対し、馬にかかわる祭祀は村落内祭祀としての意義をもつものであろう。

(3) 船形土器 (図版 8)

形態上、二つの類型がある。一つは慶州金鈴塚出土の 2 例・伝慶尚北道玄風 1 例のように船形に脚の付くものであり、他の一つは脚台のない船形土器である。

① 金鈴塚 A (図版 8-1)

「細長い板張りの木船を現わしたと覚しく、長さ 7 寸 5 分のやや中程の脹った体には作りの上に両縁板張りの形迹をとどめ、前後端にある二段の飾がそれから延びた状態を呈し、舳先・艫ともに其の間に横板を渡す」。人物は「裸体で、前に大きな陽物を現わし、また舌を出したグロテスクなもの」である (梅原 1931・33)。後述の船形土器のように「舷側にフエンダを持たず、またピボットも見当らない」(北野耕平 1972)。船と特異な人物の関係は興味ぶかい。

② 金鈴塚 B (図版 8-2)

「船そのものの形は艫の部分が幅広くて、舳先が突起状をなして、其の内側に横板を加えた点でやや丸木舟に近い形をしたもの」である。漕手とみられる人物像は A と大差ない。構造的に「船首自体がかなり上方へ反り上っていて、その内面に波除けの板を当てている」(北野 1972) ことは注目される。

③ 伝玄風 (図版 8-3)

ゴンドラ型の船形土器で、三角形・四角形の透孔をもつ脚がつく。左右対照をなし、舳・艫の側面に円形浮文が施こされている。一見して子持勾玉状を呈することは注意されるが、むしろ船自体が鳥形をなすようである。船の構造は、両舷に粘土帯を貼りつけた舷側板の表現があり、準構造船と推定される。船頭が「鳥頭仮面を用いて」おり、「頂部と左面は毀損しているが、欠損のない右面で観察すれば、うたがいなく鳥頭面それも鳥類の特徴がみられる仮面をつけたと考えざるをえない」と指摘し、太陽靈船と想定されている (方善柱 1965)。また同資料について、松本信廣 1971 は、「最近朝鮮の伽耶の古墳から鳥の仮面をかぶった船頭が櫂を按じている状景を表わした船模型の土器が発見せられているが、もしこの船を銅鼓の船と同一系統のものとする、靈魂を鳥が他界または太陽の国に運ぶという思想が、かつて朝鮮にも存在していたことになる」と示唆された。

④ 湖巖菟集品 A (図 8-5)

形態上の特徴から、「肩部にフエンダを示す断面四角形の突帯が舳から艫にかけて

II 異形土器の分類

の舷側にそってつけられている。「フェンダから上には幅 1.0cm 内外の狭い上棚がとりつけられ、その前後端は一段と高くなっていわゆる飾板」がつく。両舷側に 4 対のピボットが配列されている。容器の内部には「船梁などの付加物はない」（北野1972）。

⑤ 湖巖蒐集品B（図版8-6）

Aと同形品であるが、ピボットが3対である点が異なる。焼成等も酷似する。

⑥ 湖巖蒐集品C（図8-8）

「舷側板が両舷とも1枚の板からなりフェンダを欠いている」。舷側板に4対の突起すなわちピボットがみえる。船体内部に「5本の細い横梁」も表現されている。構造的に宮崎県西都原古墳出土の船形埴輪に類似する。準構造船であろう。

⑦ 梨花女子大博（図版8-4）

形態的に⑤と酷似する。「舳と艫の部分に設けられた船体板上に立てられた隔壁には両側とも半円形の刳り込みを欠いている点だけが異なっている」（北野1972）。④⑤と本例は、製作法・胎土・形態の類似性から同一の時期、同一の窯で焼いたものであることを推察させる。

以上の資料と、わが国古墳時代の西都原古墳群出土の船形埴輪との構造的類似性はすでに論じられておりであり、1980年に「邪馬台国への道」踏査で復原された「野性号」もそうした観点で設計製作されたのである。

このように船形土器は当時の船舶の構造や交通の問題を考えるうえで重要な資料であると同時に、祭祀的・信仰的側面もあわせもつ。金鈴塚出土例のように、裸体で舌を出し、性器を露出した怪奇な人物像は、「呪的人形である 処容郎は海のかなたから来る神であり、かつまたこの地から邪悪を負うて去るところのものである」との記述（三品彰英1969）を想起させる。金鈴塚では、騎馬人物形土器とともに副葬遺物の一つとして出土している。騎馬人物像が、冥界にゆく死者を乗せたものとの推論がある。とすればその人物像は被葬者ということになる。金鈴塚の被葬者については、装身具の大きさ、棺の規模などから年少の王子と推定されている（梅原1931・33、穴沢味光1972）。また殉葬の形跡があるという。その人物像から成人・少年の是非はうかがえないが、興味ある事例といえよう。

いっぽう古代朝鮮において、太陽崇拝・太陽信仰の存在したことは、高霊の岩壁画（三上次男1977）、新羅線刻文土器に表現された太陽から類推しえる。またそれを追証するのが伝玄風の船形土器といえよう。方善柱1964は、烏頭仮面・鳥頭人身像・ゴンドラ型の船から、「太陽霊船」ととらえている。松前健1971は、太陽船という観想は日神の乗物が死者の魂を運ぶ霊船であるという。そして「太陽馬車の信仰が、主とし

て豊饒祭儀や季節祭儀および犠牲行事と関係が深いのに対して、太陽の船の信仰は、主として巨石古墳、舟葬、死者祭儀、冥府などと多く結びついている」ことを示唆されている。金鈴塚の船形土器が、古墳に副葬されているという事実に注目するならば、とくに死者祭儀に関わるものと解釈できよう。「太陽の船は、大抵日神だけが舟に乗って旅をするのではなくして、その舟に死者の魂をも同乗させて他界への旅を行なうと考えられている」(松前1971)のである。

このように、金鈴塚・伝玄風出土の考古資料は、5～6世紀代において、新羅・伽耶の地域に太陽信仰が存在していたことを如実にものがたっている。

(4) 車輪形土器 (図版7)

角環状の坏部(A類)ないしは円筒状の坏部(B類)の両側に車輪の取り付いた土器である。いずれも脚部をもつ。この種の車形土器については金載元1962によってまとめて紹介されたとおりであるが、次に簡単に個々の資料にふれておく。

① 咸安34号墳出土(図版7-1)(晋州博1984)

これは唯一の出土品である。鳥形土器とともに堅穴系横口式石室内から出土した(今西龍1920)。坏部は左右対照ではなく、一方が大きく、他方が狭い。内部は貫通する。金冠塚・昌寧校洞出土の銅製角環のような形態を呈する点は注目されよう。型式学的にみても伽耶土器の典型例である。かつて慶州博物館で展示されていたが、現在は晋州博物館において出品されている。咸安34号墳出土のその他の遺物についても、その再整理と公開がまたれる。

② 伝慶南地方出土(図版7-4)

現在は補修されているが(東博1982)、1955年刊の『世界陶磁全集』13では角坏部と脚部の一部の破損した写真が掲載されている。出土品であることを推定させる。「二つの筒口の間にはもと渦頭を三つ飾りつけていたが、いまはその二つをかく」(榎本1955)と解説されて、左右対照に施された二つの渦文がみえるが、その中間にみられる装飾については不明である。やはり渦文がついていたのであろうか、あるいは鳥形等の具象物が付着していたのであろうか。車輻数は14本である。

③ 伝晋州(図版7-2)

左右対照の円筒形坏部に2条(1条は欠損)の蕨手状の装飾が施されている(東博他1976)、脚部には長方形の透孔が交互に穿たれており、伽耶系の様相を示す。車輻は6本である。晋州博1984では、「宜寧大義面」の出土として解説されている。

④ 伝昌寧(図版7-3)

II 異形土器の分類

U字形の双口坏がつく。車輻は9本である。脚部の形状は伽耶系の高坏の特徴をもつ。昌寧の出土と伝えるが、高靈などの伽耶地域のものであろう。

⑤ 伝玄風

車輻数は12本である（李殷昌1972）。

⑥ 出土地不詳（図版7-7）

2段・交互透孔の脚部に、粗い仕上げの車輻がかなり上側につけられている。洛東江流域の出土品であろうが、新羅土器的である。

⑦⑧ 出土地不詳（図版7-5・6）

2個は同巧品であり、「1人によって同時につくられ、同じ墳墓に副葬品として埋められたことがうたがない」（金載元1962）もので、骨董商から入手されたものである。昌寧地方出土の可能性もあるという。車輻が4本で太い点は他のものと異なる。また「二つの容器を車止により安定させるために」8字形に粘土鈕を縛りつけている。1段透孔の脚部をもつ。洛東江流域の出土であろう。

⑨ 出土地不詳（図版7-8）

車輻は10本であり、形態的に③と類似する。ただ「写真でみると、完形にちかひものようである」が、「相当に修理した痕跡がみられる」という（金載元1962）。

⑩ 伝昌寧（図版7-9）

U字形の坏部は中空である。車輻は大きく10本である。⑨に酷似する。同一品との危倶をいただいたが、写真では十二分に断定しえないので掲げておくことにする。

このほか、文字どおり車形土器（土製品）が慶州皇南洞鶏林路25号墳から出土した（図版7-10）。25号墳は甕棺墓で、10余点の明器と伴出している。高さ12.5cm、幅7.5cmで当時の車の写実的な模型といえる。車の本体と車輪は組み合わせ式になっており、車軸頭には車轄用の孔が穿たれている。輻は13本で、突起した轂をもつ。轂の片側は途中で、他の側は根元で折れている。たんに荷馬車でないことは、轂側の側板がないことからもうかがえる。高句麗の舞踊塚の壁面にみえるような二輪式の牛車か馬車であったと推定しえる。フォローも付くのであろう。

車（輪）形土器や車形土製品は、咸安34号墳や鶏林路25号甕棺墓で発掘された。前者では、鳥形土器と伴出しており、その意義を考えるうえで示唆的である。古代において、車輪は太陽の表象であった。つまり「太陽を天空に転がる光る車輪」という観想が存在したのである（松前1971）⁽⁷⁾。車（輪）形土器は円筒形の坏ないしは角坏状の坏部を本体とするのであるが、両者ともU字形の筒部といってよい。その筒状容器に車輪が組み合わさるのである。とくに①②③の坏部は船の表象と解釈できないであ

ろうか。船と車の合体的な表現とみるのである。蕨手文または渦文も象徴的である。「北方コーラシアおよびそこに発源する文化に見受ける太陽神話においては、日神は、車や馬と連想せられ、戦車を駆って天空を横切るという風に表現せられ、南方ユーラシア地帯、すなわち南方海に沿う地方においては、日神は舟その他の浮揚具によって水をよこぎって示現すると表象せられ、同じ太陽神話においてもその乗物が、一方は車馬であり他方は船舶であるという対比を生み出したのである」(松本信廣 1954)。「車輪は、太陽の表徴」であり、鳥はまた船の表象であるとすれば、古代朝鮮というより、5世紀中葉段階の咸安34号墳では鳥形・車形土器が共存するという事例は、太陽船・太陽車の融合した様相をものがたってくれるのである。

(5) 龍亀形土器(神亀塚出土)(図版3-31)

1973年、味郷王陵前地区の発掘調査によって出土したものである。身は亀甲形を呈するが、いわゆる亀甲文はない。頭部・頸部は龍または天馬を想起させ、頸部・胴部・尾部には「たてがみ」状の表現とみられる突起がみられる。胴部に坏形口がつき、胸部に竹管状の注口のつくことは金鈴塚の騎馬人物形土器と同様である。胴部に瓔珞がつく。また低脚をもつ。亀形の胴部とともに龍を想わせる口からは長い舌を出す。これは天馬塚の天馬にみられる火陥の表現と共通する。四つの眼をもつようである。龍と亀の合体した獣ともみれるが、龍・天馬・亀の合体した神獣として評価したい。『三国史記』炤知王10年(488)の条には「東陽献六眼亀。腹下有文字」とみえるが、この龍亀形土器はまさにそうしたものであったにちがいない。龍亀形土器は、積石木槨墳の被葬者の脚部にあたるところで、瓔珞付高坏など多数の土器類や鉄斧と伴出している。壺・甕や高坏に囲まれた状況で出土する点は興味ぶかい。

ところで高句麗壁画古墳の新羅・伽耶の百濟への伝播・受容関係において墓制の構造は決定的な役割をもつ。新羅、とりわけ王陵級の古墳の構造はいずれも積石木槨墳であり、慶州では構穴式石室墳は6世紀末になって出現する。したがって高句麗の南化政策、慶州への一時的駐屯など高句麗の政治的・影響力は新羅に及んだのである。その一方で、文化的影響もあり、新羅の文物のなかに高句麗系あるいは高句麗の文物が存在する(秦弘燮1976, 小田富士雄1979, 崔鍾圭1983)。そして高句麗の壁画の受容に際して、墓制の構造的な側面に制約された結果、天馬塚・金鈴塚などにみられる障泥・彩板・漆器に描かれた怪鳥・怪獣などの絵画が顕著な発達をとげたといえる。壁画受容の一形態である。もちろん慶尚北道榮州の於宿述干墓のような壁画墳も存在するが、これは横穴式石室墳であり、新羅領域の北辺にあたり、新羅中枢部における

II 異形土器の分類

現象ではないのである。そうした伝播は、九州地方に発達する装飾古墳にもうかがえる。高句麗からの直接的な影響というより、6世紀代の国際関係をかんがみると、装飾古墳の成立・発展に新羅・伽耶の文化的影響のふかいことが知られるのである。太陽船・天の鳥船思想、四神思想などである。慶尚北道高靈の岩壁画（李殷昌 1971、三上次男 1977）のモチーフには装飾古墳のモチーフとの共通性があり、無文土器時代や原三国時代のものでなく、三国時代の伽耶の所産であろうと考えられる。

(6) 家形土器（図版 9）

現在、和歌山市六十谷の出土資料をふくめ、9例が知られている。伝慶尚北道玄風、伝慶尚南道陝川・晋州、伝慶尚南道のもの各1例、出土地不詳4例、六十谷1例である。環形口の位置、建築様式から、ほぼ三形態にわけることができる。つまり、

A類一切妻式屋根、平地式床構造をもち、環形口が屋根から壁にかけて設けられているものである（③・⑤・⑥）。

B類一切妻式屋根、高床式建物で、屋根上に環形口がつく（①、②？、⑧）。

C類一切妻・高床式で環形口をもたないもの（④）。

これらはおそらく家屋の種類の差違を表現するとともに、家屋の地域性を示すのであろう。細部においてもそれぞれ特色をもつ。③の屋根上および入口部に2匹のおそらくネズミが表現されているものは、一見して穀倉と考えられる。棟持柱の表現もみえる。⑤の妻部の構造は③と同様で、妻入りの入口に扉がつく。家屋内の様子は写真からは明らかでない。屋根の装飾文様は、洛東江流域の器台に類している。②はやはり⑤と類似するが、建物の内部は階上式になっており、階段がつく。側面の斜格子文も伽耶土器のそれを想起させる。⑤⑥が台状部に造形されている点は、前述のように三国時代異形土器の特徴の一つとして把握できよう。④は晋州某氏の所蔵であったことから晋州付近の出土と推定されている（金元龍 1969）。高床式建物である。切妻式で、2×2間の総柱の建物である。四壁は刻線鋸歯文がめぐらされ、一方の短壁に入口がわりの注口がつき、倉庫と推定されている（金元龍 1969）。⑦は1978年に報告されたものである（梨大博 1979）。切妻式で、屋根上と横に環形口がつく。高床式が4本の柱によって支えられている。

六十谷の家形土器は、1923年頃に発見されたという。環状把手付長頸埴1、把手付短頸埴1、有蓋脚付壺1、有蓋短頸壺1と伴出している。いずれも5世紀中葉ごろの伽耶土器であり、洛東江西岸地域からの舶載品である（北野 1969）。これらの土器は出土資料として認められよう。遺跡の性格は明瞭でないが、墳墓に限定する必要はな

い。その西方約2.5kmに位置する鳴滝倉庫群跡（藤井保夫1984）では、おそらく伽耶西部地域（晋州から晋陽地域）の土器と酷似したものが出土している。ともかく前述の家形土器の出土地が明白でないため、六十谷の資料は貴重である。金元龍1969でも指摘されているように、以上の家形土器が、すべて洛東江流域の伽耶地域の出土であることは首肯されよう。

家形土器は、平地・高床式の倉庫・穀倉を模倣したものである。明器として副葬されたのであろうが、「穀倉」であることは看過しえない。表2にも示したように、新羅・伽耶の古墳で稲・稗の出土例が多い（東1979）。それらを直接高坏に盛って供献副葬する場合と、穀物、生産の豊饒の象徴というべき穀物の貯蔵庫としての家形土器を副葬する場合があるわけであるが、その根底にある穀霊信仰とか供献儀礼的な要素は基本的に同じであろう。

なお関連資料として掲げた家形土器⑨は、統一新羅時代のものである。入母屋式の屋根は瓦葺きであり、妻に入口をもつ、高さ43.5cm、底経28.0×36.0cmの規模で、「門を支えた千鳥形の突起が4個ある」。もともと棟に鴟尾もあったらしい。側壁の最下底には隆起線文で床構造を表現している（韓炳三1979）。また妻・平側に文様が押捺されているが、一つは人体、他の一つは亀を表現したものと考えられる。土器自体は明らかに骨蔵器である。それゆえ人間・亀の装飾は意義ぶかい。

2 装飾土器・土偶（図版10～14）

「土偶群像土器」「土偶装飾土器」などと称されている装飾付土器で、30余例が知られている。装飾の対象となった器形は、高坏形土器の蓋がもっとも多く、次いで長頸壺であり、高坏身・甕・碗・器台にみられる。

高坏蓋に装飾された土偶の種類は、(1)人物—立像・男子像・女子像、(2)動物像—(1)魚類（鯰・鮎・海星）、(2)甲殻類（蟹）、(3)両生類（蛙）、(4)爬虫類（蛇・亀）、(5)鳥類、(6)「龍」である。

次に個々の資料について簡単にふれておく。

① 出土地不詳（図版10-1）。手をひろげ、男根を表現した人物像1、坏を差し出した女人像、琴を弾く女性像が表象されている（梨大博1978）。

② 伝慶尚北道善山出土（図版10-2）。性行為の模倣あるいは所作する男女各2人が描写されている。2段交互透孔の高坏蓋に表象されている（東博1982）。

③ 出土地不詳（図版10-3）。手をひろげて立つ人物1と亀1、鳥1が配されている。鳥の頭向は右転回（時計の針と逆まわり）である。

II 異形土器の分類

④ 出土地不詳(図版10-4)。性行為を所作する男女3人の像が描かれている(梨大博1978)。

⑤ 出土地不詳(図版10-5)。両手をひろげて立つ3人の像が表現されている。そのうち2人は男根を露出させている。

⑥ 出土地不詳(図版10-6)。船に乗る人物1と、魚2を配置するという(久貝健1975)。

⑦ 出土地不詳(図版10-7)。犬?2匹を配置する(久貝1975)。1匹の胴部には竹管文が施されており、犬としては不鮮明である。1段透孔の高坏は珍しい。

⑧ 慶州(皇南洞)109号墳出土(図版10-8)。古墳は積石木槨墳で、4槨あるうちの第2槨から出土した。木槨は三段床からなり、装飾土器は主として土器のみを置いた第1の段床から検出された。土器類のほとんどが破壊されていたという。「新羅焼中、南縁に接して、蛇を象った装飾を付けた高坏蓋の発見せられたことは、両縁に近く魚骨の入る高坏の蓋をつけたまま存したことともに留意すべき点であろう」「また遺骸部に近い側に大型の土器が正しく坐しその中に植物質穀状の腐蝕物が含まれ」ていた(斎藤忠1937)。蓋の下縁両側に「円輪状の把手飾り」も付着する。鯰や鰻とみる見解もあるが、蛇であろう。第2槨の年代は5世紀後半～6世紀初(伊藤秋男1974)であろう。

⑨ 慶州仁旺洞出土(図版10-9)。獣3頭がつまみの周囲に装飾されている。1頭分は剥離した状態で出土したという。動物の頭向は右方向である。出土古墳の明らかな貴重な例であり、出土状況等の詳細な報告がまたれる(嶺南大博1982)。

⑩ 出土地不詳(図版11-1)。一は蛙のようである。四肢を広げて這いつくばっている。他に蛇がみえるが、蛙を追う姿態を表現したものでであろう(東博1982)。

⑪ 出土地不詳(図版11-2)。ザリガニ?2を配する。つまみの部分は小形罎のような形状を呈する(李蘭暎1976)。

⑫ 出土地不詳(図版11-3)。蓋全面に2匹の蛇が這うように配置されている。周囲に円形列点文を施す(李蘭暎1976)。

⑬ 出土地不詳(図版11-4)。蓋の外縁部や2匹の蛇が這い、その1匹は蛙に襲いかかる瞬間を表現しているかのようである。その内側に魚(鮒?)2匹、蟹1、亀1、つづいて欠損部があり、鯰?1が配されている。蛇を「鰻」、蛙を「不明」とする解釈もあるが、モチーフとして扱えば、やはり蛇と蛙であろう。内側の動物類はすべて淡海水のまじった河口域の魚類・亀を造形したことになろう(秦弘燮1974)。

⑭ 出土地不詳(図版11-5)。両手をひろげ、相対する人物2人と、亀1、犬1、

不明動物1，蛇1，鯀2が円形に配置されている。人物の性別は不明である（東博1982）。人物の左右の亀・鯀は人物に向かって、その他は右斜めに貼り付けている。

⑮ 伝慶州皇南洞出土（図版11-6）。高坏蓋のつまみ部に2人の人物を配する。鈕内に配置した例は唯一である（浜田1927，有光1955）。

⑯ 慶州皇南洞出土（図版11-7）。坏蓋上に2人，おそらく3人を配したものとみられる。2人とも座る姿勢をとる（有光1955）。

⑰ 出土地不詳（図版11-8）。2匹の亀を表わす。亀甲は格子文で表現するが亀であることはうたがない（有光1955）。

⑱ 出土地不詳（図版11-9）。ヒトデを表象したものである（有光1955）。つまみ部には⑪と同様の小形坏がつけられている。

⑲ 慶州仁旺洞出土（図版14-4）。2羽の鳥が装飾されたものである。出土古墳は明瞭である（嶺南大博1982）。ただ⑨と同一古墳の出土であるのか定かでない。

⑳ 出土地不詳（図版14-1）。高坏の坏内に1羽の鳥を装飾する。1段透孔の高坏で，扁平な把手がつく。坏内に配したものはこれのみである（東博1982）。

㉑ 出土地不詳（図版14-2）。高坏の口縁端に2羽の鳥を止まらせている。身の外側に瓔珞を垂らしている（東博1982）。

つづいて長頸壺等に装飾された諸例を列举しておくことにする。

㉒ 慶州路東洞11号墳出土（図版12-1）。蛙を追う蛇が3体，性器を露出した男子像2体が造形されている。モチーフ自体は次に述べる㉔に類する（金元龍1979）。

㉓ 出土地不詳（図版12-2）。壺の肩部に細長い「蛇」状の動物が表象されている。向かって右方向に這いまわるような表現である。従来「蛇文長頸壺」とよばれてきているが，「胸部には2本の前足が，口もとには触角状の陰刻線3本」（天理ギャラリ1980）があり，蛇よりはむしろ龍と考えた方が妥当であろう。

㉔ 慶州皇南洞（味鄒王陵地区）鶏林路16地区30号墳出土（図版12-3）。壺の肩部から頸部にかけて諸々の情景が彫塑されている。亀・鳥・弹琴像，蛙を追う蛇，四つ這いの女性像，その後に性器を露出させて立つ男子像，さらに鳥・蛇などがみえる。蛙を追うモチーフ，性的行為，楽奏（弹琴）は高坏蓋の意匠にみたとおりであるが，まさに「多産・豊饒を祈る呪術的シンフォニーである」（金元龍1979）。

㉕ 出土地不詳（図版12-4）。短頸壺の頸部から肩部にかけて2頭の鹿を表現する。胴部を渦文で扁平につくる点は特異である。

㉖ 出土地不詳（図版12-5）。壺の「頸の環鈕に遊環でつらねた心葉形の垂飾をめぐらせ，肩に立体的な群像をたて並べて装飾としていることである。群像の造型は

II 異形土器の分類

素朴であり稚拙であるが、だいたい二つを一組になるように布置している。それは男女がまさにいだきあおうとし、犬とあいたいし、舟をこぐ（舟はなかばをかくが、もとは対のものがあつたのであろう）などのほかに振分髪の女人をあらわしている」（楳本1955）。これも典型的な新羅土器である。

⑳ 出土地不詳（図版12—6）。長頸壺の肩部の2ヶ所に対向するかのようになり、亀2匹を配する（嶺南大博1982）。古新羅末期から統一新羅期、7世紀代の土器であろう。この種の装飾土器でもっとも後出する例である。

㉑ 出土地不詳（図版12—8）。慶州皇南洞の出土であるかもしれない。長頸壺の頸部から口縁部にかけての破片に表現されたもので、龍と考えられる（李蘭暎1976）。㉒とくらべて具象的である。

㉒ 出土地不詳（図版12—9）。甕の肩部に並列した鹿2頭を配置したものである。

㉓ 出土地不詳（図版12—7）。脚台付埴というべきものであり、台状部に数頭の馬が配置されている（有光1955）。このような土器は新羅、伽耶土器では類例がない。むしろ日本の装飾器台に造形された馬を想起させる。

㉔ 釜山福泉洞11号墳出土（図版14—5）。「亀形土偶付筒形器台」として報告されている（鄭澄元・申敬澈1983）。堅穴式石室の短壁付近で、円底短頸壺と組み合わさって出土した。亀の表現、とくに甲羅は器台胴部の文様と同じ施文具によってなされている。古墳の年代については5世紀中葉頃に比定されている。

㉕ 出土地不詳（図版14—3）。把手付台付短頸壺であり、把手の上部に1羽の鳥が飾られている（秦弘燮1974）。

㉖ 出土地不詳（図版13—8）。台付のコップ状の坏部の下半部から獣形様のものを突き出したものである。

㉗ 出土地不詳。高さ19.0cm、口径10.0cm、底径12.0cmの小形の器台である。筒部の二面にわたって人物が表現されている。両者とも頭部のみ立体的に造形されているが、胴部、手足などは線刻されている。いずれも男根が明瞭に線刻されている。年代については定かでないが、製作技術・胎土から三国時代の土器である可能性がつよい。この種の器台自体、珍であり、人物像の表現そのものも興味ぶかい（京都大学蔵品）。

㉘ 出土地不詳。百済の地域で出土したとのことである（藤沢一夫1955）。長頸壺の肩部に鈴をとりつけている。

以上のような装飾土器を意匠のうえで抽出すると次のようにまとめられよう。

(イ) 両手をひろげて立つ男女像

(ロ) 性行為の所作像

- (イ) 蛙を追いかける蛇の像
- (ニ) 弾琴（奏楽）像
- (ホ) 魚類のみの装飾
- (ヘ) 獣（鹿）のみの装飾
- (ト) 鳥のみの装飾
- (チ) 亀のみの装飾

というようで、一見多様であるようであるが、モチーフはかざられている。

(イ)の両手をひろげ、歌舞する姿は、線刻文土器にもみられるモチーフである。なかには性器を露出する人物もある。土偶の人物像とも共通する表現であるが、土偶との差は大きさと製作上の精粗のちがいにすぎない。(ロ)のモチーフは、装飾土器の核心というべきものである。そのリアルな表現の意味するところは大である。これらの土器はまず古墳出土品であることである。つまり埋葬儀礼における諸々の副葬品とともに出土したものと推定されるのである。死はまた同時に生である。死に対して生殖の象徴、生産（家族の生産）の象徴である性的行為を所作する像（模倣の像）を副葬したことは、まさにそうした再生産を祈願したものに他ならないであろう。同時に穀物の豊饒祭・葬儀に、歌舞飲食をとまなうことは古今東西共通の現象であり、祭りの重要な実修である。その意味で(ニ)の奏楽・弾琴像が多用されたのである。古代の楽器は鈴をはじめ、琴・笛・太鼓などが壁画あるいは土製品、銅製品として表現され、存在するとおりである。これまでのところ装飾土器・土偶として表現されたものは、新羅土器では琴、百濟土器では鈴がある。新羅・伽耶においては鈴付土器の類品はかなり多い。ただ葬送や祭儀における琴のもつ意味は特殊であろう。

(ホ)から(チ)にみえる動物（魚・獣）の表現はいかなる意味をもつのであろうか。魚類は新羅や伽耶土器にかざらず、高麗・李朝の陶磁器に多用され、好まれるモチーフの一つである。民族的な特性の表現とみられる。と同時に表1に示したように、魚骨類の出土の多いことも注目されよう。魚類の同定については必ずしも成功していないようである。しかし高霊池山洞34号墳SE-3石槨ではタラなどの魚類（楊洪準1981）、大邱不老洞乙号墳ではサメ？などが出土している。淡水魚・海水魚の両者があるようである。魚類を中心としたモチーフの典型例である⑥の装飾土器の高坏内に果して実物の魚類等が納められていたかどうか明らかでない。しかし魚・貝類を入れるかわりに、高坏蓋への造形において、そうした魚類を奉祭したという類推もなりたつ。5世紀中葉を前後とする時期の釜山福泉洞古墳群においては魚骨や鶏骨類の出土例が多い。魚は水中における泳ぐ動物であり、鶏は地上において歩き、飛翔する動物、鴨や

II 異形土器の分類

雁などは空を飛ぶ動物であり、それらによって海（水）・陸・空の動物を象徴させたのかもしれない。いずれも墳墓で出土しているが留意される。なおこのほか出土する動・植物の遺骸に、貝類と穀物がある。

猪（犬?）は、角坏付脚台猪形土器にみられたとおりである。鳥についても前述のとおりであるが、鳥だけの装飾のものと、群像を構成する一つとしての鳥の二者がある。それぞれ意味をもつものであろう。

装飾土器の製作法は、高坏・長頸壺にしても、文様を含めて造形を終了したのち、別作りの土偶を付着させているのである。それは土器本体の文様上に土偶の付くことなどから容易にうかがえる。後述のように剝離した土偶があまりにも多いことは製作上、何らかの理由があるはずである。そこでごく一部を観察しえたところ⁽⁸⁾、いずれも剝離面は焼成が進み、火まわりも良好であった。つまり粘土の乾燥が相当に進んだ段階で付着させていることが判明した。おのずと焼成後剝離しやすいわけである。

慶州近辺の窯跡群において、異形土器・装飾土器・土偶の類が出土または採集されているのか寡聞にして知らないが、土偶の造形的側面からみた類似性は、一定の窯場で大量生産された可能性のつよいことを示唆する。したがって土器本体と土偶が複数の工人によって、分業的に製作されたことも推定される。装飾土器のモチーフがある程度限られているのも、そこに製作の意図とは別の意志が働いたからにちがいない。

装飾土器の一部を構成する「土偶」については、李蘭暎1976『新羅の土偶』や「古新羅の土偶」上・下（『韓国文化』1981・1・2）でまとめられている。本稿においても土偶という名称を無条件に使用してきたのであるが、韓国ではほぼ定着してきているようである。中国考古学では、「陶俑」という用語が使用されている。わが国では縄文土偶のように、縄文時代の土製品しかも人物に限定して用いられている感があるが、弥生土偶や木偶として使用される場合もある。埴輪に関しては土偶と呼ばれることはない。若干の問題もあるが、動物を含めて土偶という用語を使うことにする。

慶州を中心として出土する土偶のばあい、まず検討すべきは、前述のように土器を装飾する土偶と単独で製作されたものがある点である。前者を「装飾用の土偶」、後者を「独立の土偶」「独立した形態の土偶」と呼び分けられている（李蘭暎1981）。その認定にあたっては、実物資料が土器本体から剝離したものの痕跡をみれば理解できよう。また大きさにおのずと差違もある。つまり10cm以上、とりわけ20cmをこえるものは明らかに単独の土偶であり、装飾土偶とは区別されよう。

土偶の初見は、『朝鮮古蹟図譜』3（1920）にみられ、その後断片的に知られるようになったという。李王家の博物館などにも収集されていたらしい。いずれも出土地

が不明なものばかりであった。発掘資料としては、1924年に調査された金鈴塚で、舟形土器内の人物像（土偶）が嘴矢といえようか。この土偶は、股内に陽物を出し、舌を出したもので、新羅土偶の特徴を如実にものがたっている。小泉頭夫1969によれば、その翌年の1925（大正15）年に「そのころ朝鮮鉄道慶北線の慶州駅に機関庫が増設されることになって、その敷地の埋立土の採掘場である慶州郊外皇南里から小石室墳が次から次に出土したので、私共は5月から7月にかけて慶州に滞在して、その整理調査に従事することを余儀なくされた。この間私共が目撃して工事を差しとめて調査した古墳だけでも50数基に達したほどで、暗に葬り去られたものを合すると、この区郭に存在した古墳は夥しい数に達したものと思われる」という状況であった。その「小石室の副葬品の殆んどすべてが各種の土器で充たされ一見土器蔵の感があり、しかもこれらの土器の大多数のものが土偶によって装飾されている」ものであった。ともかく皇南里の数十基以上の古墳で各種の土偶・装飾土器が出土したのであり、前述の出土地不詳として装飾土器や後述の土偶のかなりは、この時出土したものであるかもしれない。それらの古墳群の年代については「積石塚古墳の造営からやや遅れた三国時代末期に近い6世紀後半の特殊な古墳群であったという外はない」（小泉1969）とされる。また大形の人物像などについて、その「一括遺品は慶州や大邱に在住した日本人に分割愛蔵されていたものでその出土や入手の経路は詳かでないが、慶州付近の石室墳から発見されたものであるとのことであつたが勿論確証はない。しかし各像はいずれも単独の土偶として製作されたものであつて前記の形象土器や土器の装飾として製作された土偶類とはおのずから性質を異にし、顔面の表情や動作の表現には一段と進歩のあとが窺われる」という（小泉1969）。

その後1934年に慶州皇南里の109号墳で装飾土器が出土したが、それ以後1972年の味鄒王陵前地区の整備事業にともなつて発掘された鶏林路の古墳で出土するまで、実に40年間をまたねばならなかつた。この鶏林路もやはり皇南洞に位置している。また慶州古墳群において、積石木槨墳いがいの墓制である小石槨・甕棺墓・馬葬墓などが味鄒王陵地域であらためて知られるようになった（文化財管理局1975・1980）。このうち鶏林路の第16地区が、かつての皇南里の小石室群に近いものといえよう。また皇南洞の北部にあたる路東洞の11号墳でも装飾土器が出土した。要するに慶州古墳群において皇南洞を中心として装飾土器・土偶の出土する傾向がある。

さて土偶には、男子像（武士像・農夫像）、女子像、奏楽雑伎像、性表現の男女像、騎馬人物像、犬・牛・馬・豚・羊・鹿・兎・猿・虎・亀・龍・鳥（鴨）・鶏・魚・蟹・蛇・蛙などの動物像などがある（李蘭暎1976）。前述の皇南里の古墳群では「数百個」

II 異形土器の分類

の土偶が出土したという(浜田1927)が、高坏蓋では面的に制約があり、装飾数も限られる。また長頸壺のばあいでも多くて10数個であろう。したがって100個体前後の装飾高坏・長頸壺が出土したことになろう。

土偶の小世界は、装飾土器に表現されてはじめて意味をもつのであろうが、分離された状態の土偶についてもその形態を検討することにしたい(李蘭暎1976・81)。

それらを細別すると、(イ)裳をつけた男子像 (ロ)正装をした男子像 (ハ)喜怒哀楽を表現した人物像 (ニ)農夫像 (ホ)武人像(太刀を持つ人物) (ヘ)チゲを担う人 (ト)樽を頭に置く女子像 (チ)騎馬人物像 (リ)性器を露出した男子像 (ヌ)チマをつけた女子像 (ル)正装をした女子像 (ヲ)奏楽像(楽器を弾く男子像, 琴を弾く人物像) (ク)歌舞をする人物像 (カ)雑伎像 (コ)仮面像, にわけられる。

これら諸々の像は、装飾土器の土偶のモチーフとかわるところはない。もちろん小土偶が装飾土器と一連のものであるからには当然のことである。しかし資料が多だけに多彩である。そのなかで、農夫像や頭巾をかぶる人物、奏楽像は農耕祭的なもの、農楽という側面から解釈しうる余地がありそうである。そこに男女の性的所作儀礼がともなっているのである。人間の再生を祈願するとともに生産の豊饒を願う儀礼としてとらまえることができよう。「土偶で装飾された壺などは、人体の誇張された表現であるが、まったく写実的な性行為の表現をつうじて、豊饒な生産力を祈願したり、蛇・蛙の付着によって辟邪の意味をあたえ、大切に保管しなければならない種子などの貯蔵容器かあるいは祭祀用の酒を醸造した土器であるかもしれない」と述べられている(李蘭暎1976)。

また仮面像や雑伎像は農耕儀礼や葬送儀礼とのかかわりを示すのであろう。

李殷昌 1983 は、「新羅土偶にあらわれた民俗」と題して、さまざまな視点から考察を加えられた。たとえば「男女性器崇拜すなわち性神信仰による種族繁殖の多産と農耕生産の豊饒を祈願し」、「各種の動物神崇拜すなわち動物神信仰による、やはり種族繁殖の出産と生産経営の豊饒を祈願する祭典」「伽耶琴の奏楽すなわち神楽をかねそなえた総合的な祭典である」という。

土偶装飾土器という舞台、祭祀の場はしだいに明らかになりつつある。皇南洞の一面をしめす古墳群において各種の土器が充填した「一見土器蔵」という様相の出土状況、その大多数が装飾土器であったという記述(小泉1969)は重要であろう。

装飾土器の年代については、上限は皇南洞 109 号墳第 2 柳出土の資料であり、5 世紀後半ごろに比定しえる。鶏林路 30 号墳の土器は 6 世紀代に位置づけられる。出土地不詳の土器もその大半は 5 世紀後半から 6 世紀前半代のものである。慶州いがいの福

泉洞10号墳の装飾器台は5世紀中葉～後半（鄭澄元・申敬澈1983）である。前述の嶺南大博物館所蔵の亀付装飾壺は6世紀末から7世紀代のものである。したがって慶州古墳群において装飾土器は、5世紀後半から6世紀前半代に盛行し、6世紀後半から7世紀まで継続したといえよう。

いっぽう装飾土器の出土古墳は、積石木槨墳ではなく、その周辺に所在する堅穴式石室墳などが多いようである。王陵ないしは王陵級古墳の墓制は、積石木槨墳であり、金冠塚・瑞鳳塚・天馬塚のような古墳が想定されるが、いずれも異形土器や装飾土器の類は出土していない。また異形土器を出土する古墳と装飾土器を出土する古墳においても構造上に差違がみとめられるようである。

Ⅲ 異形土器の時期と分布

本章では異形（装飾）土器の時期と出土地域について整理しておくことにする。出土遺跡の明らかな資料を中心としてみると、図1のようになる。

鳥に関する祭儀は古くさかのぼる。農耕文青銅器・双鳥竿頭飾にみられるように青銅器時代には確実に実修されている。鳥形土器として盛行するのは、咸安34号墳の年代である5世紀中葉を前後する時期である。5世紀後半には鳥形漆器も出現する。鳥・鶏（骨）の供献・副葬、鳥翼形の冠飾りなどもふくめ、5～6世紀は鳥祭儀の発達した時期といえよう。表現形態は異なるが、新羅伽耶の地域で出土している。

馬形土器・騎馬人物形土器も現時点では、5世紀以降である。新羅・伽耶において、400年を前後とする時期、高句麗から騎馬風習をあらたに受容したことは馬甲・馬具によってうかがえる。魏書韓伝にみえる葬送における牛馬の使用はすでに3世紀のことであるので、将来、馬関係遺物はさらにさかのぼる時期に出土する可能性がつよい。今日では伽耶の角坏付騎馬人物形土器が5世紀中葉、新羅金鈴塚の騎馬人物形土器が5世紀末の所産といえよう。高句麗の壁画では、4世紀中葉の安岳3号墳、5世紀初の徳興里古墳、5世紀前半代の舞踊塚などにみえるとおりである。騎馬人物像自体はきわめて時代を超越するものであり、ここでは騎馬人物形土器が副葬用の祭器であったという点を重視しておきたいとおもう。

船形土器・家形土器・車形土器の出現も5世紀中葉ごろまでさかのぼりうる。

装飾土器・土偶は、5世紀後半の皇南洞109号墳第2槨がもっとも古い。装飾土器のなかでも有蓋高坏の方が長頸壺より先行するものとみられる。7世紀代にくだる装飾土器もあるが、6世紀代が盛期であろう。

III 異形土器の時期と分布



図2 形象土器・裝飾土器・土製品・線刻文土器の分布

異形（裝飾）土器は、5世紀前半～中葉を上限として、下限を7世紀の前半とする古新羅時代の時代的所産といえよう。

ついで各異形土器の分布状況についてふれておく。

鳥形土器は、形態などで検討したように、伽耶系と新羅系の土器に分類できた。とくに洛東江流域に分布することも推定しえた。時期的には洛東江西岸地域が先行し、新羅慶州地域に分布が拡大したとみてよいであろう。

家形土器は、鳥形土器と同様、分布の中心地域が洛東江流域にある。その根拠となるのは、和歌山六十谷遺跡の出土の伽耶系土器であり、家形土器とともに伽耶の地から流入したものと解釈しえたからである。家形土器とともに伽耶の地から流入したものと解釈しえたからである。家形土器と直接的な継承関係はないであろうが、統一新羅期には家形の骨蔵器（図版9—10）が存在していることも指摘される。

馬形・騎馬人物形土器は、脚部の形状から新羅・伽耶系に分類することができ、角坏付の馬形・騎馬人物形土器は洛東江両岸地域の伽耶土器に、他の馬形土器は新羅系で洛東江流域の東岸から慶州に分布する。

車形土器は、咸安34号墳の出土例から伽耶地域に存在したことは確かである。つまり角坏状の円筒部のつく車形土器は伽耶系である。そのほか新羅土器の特徴を備えた車形土器もあり、新羅・伽耶の両地域に分布するものといえよう。

船形土器は、類例は少ないが、新羅・伽耶地域に分布する。

龍亀形土器は、今日のところ慶州にのみ出土している。

裝飾土器、土偶は、慶州いがいの出土例は少ない。慶尚北道開慶や慶尚南道と伝える土器は、いずれも高坏の口縁端や坏内に止まる鳥を裝飾したものである。また双鹿付裝飾壺も慶州の裝飾土器と趣を異にする。釜山東萊の福泉洞10号墳出土の亀裝飾器台⁽⁹⁾は唯一の出土例であり、こんご検討を要するが、裝飾土器に多い有蓋高坏や長頸壺とは器形上で異なっている。なお同墳は5世紀の第3四半紀頃に位置づけられているが、この時期以降、東萊地域は、新羅との諸関係がきわめてふかくなっている。例外といえるのが伝善山出土の裝飾土器であるが、かりにそうであるとしても善山は5世紀後半以降新羅色のつよい地域（領域内）にあったことと関連しそうである。

以上の分布状況をまとめると、

1. 形象土器のなかで、龍亀形土器、騎馬人物形土器のあるもの、角坏形土器のある種は慶州を中心とする新羅の地域に分布する。そのいっぽう鳥形土器・家形土器は洛東江流域の伽耶地域に主として分布する。

2. 裝飾土器・土偶は慶州に集中して分布する。きわめて新羅的な土器である。

3. 線刻文土器も洛東江以東の新羅地域（とくに慶州）に数多く分布する。

IV おわりに

4. 異形土器の分布は、土器によっては洛東江流域の以東の新羅地域と、洛東江以西の伽耶地域に大別される。また同時に両地域にまたがって分布する土器もある。異形土器が、土器である以上、おのずと一般の土器型式と軌を一にするのであり、新羅土器と伽耶土器に大別されるのである。

IV おわりに

異形土器には、諸々の形態があるが、新羅・伽耶の両地域において、土器型式差とあいまって顕著な地域性を示すことが明らかとなったといえる。古代祭祀においても、その対象となるものがあるはずであり、ときに祭祀の対象化あるいは表象化された遺物が存在する。祭祀的遺物と無条件に認定した異形土器は前述のとおり、そうした性格を十二分に有している。対象化されたものは、馬・鳥(鴨)・龍・車・船・家・人物、そして祭祀の場であった。

異形土器のなかで、出土状況の明白な資料は数少ないが、積石木槨墳・竪穴式石室墳・竪穴系横口式石室墳・甕棺墓などの墳墓で出土している。したがって葬送儀礼の一環としての副葬という点において評価すべきである。副葬状況には、他の副葬遺物ときわだった特色はみられなかったが、墳墓の構造によって出土のあり方が異なるようである。つまり異形土器の出土古墳に差違がみられるのである。慶州では、金鈴塚のように騎馬人物形土器・船形土器などの形象土器を出土する古墳と、皇南洞小石室墳のように装飾土器・土偶を出土する小規模な古墳群と、異形土器を副葬しない古墳群とがある。崔秉鉉1983が積石木槨墳のなかで「集団墓2式」と分類した古墳では、109号墳第2槨の装飾土器、82号墳東・西塚出土の瓔珞付台付長頸壺、皇吾里33号墳東槨の瓔珞装飾台付盃、同西槨で瓔珞付高杯を出土しており、しかも「女子墓槨」と想定しえることから、「女性(子)が精神世界を管掌する専門化された特殊集団である可能性はないか」という。祭祀集団とまで断定はしえないかもしれないが、異形土器出土古墳の性格を意義づけた見解は興味ぶかい。装飾土器を有する古墳は、慶州古墳群において、地点的にも集中する傾向がある。先述のように、数十基の古墳群から数百の土偶が出土したことからもうかがえる(浜田1927, 小泉1961)。

金冠塚・瑞鳳塚・天馬塚・皇南大塚南・北墳において、子持器台などの異形土器をのぞいて、形象土器や装飾土器・土偶が出土していないことは示唆的である。金鈴塚のみ例外といえるが、これら5世紀中葉以降の王陵ないし王陵級古墳における出土のあり方は、装飾土器・形象土器に表象化された祭祀・祭祀形態が異なることをものが

たっている。ただ穀物・鶏卵類は出土している。穀物・鶏卵の出土と鳥形土器・家形土器の副葬にいかなる差があるのか明瞭に解釈しえないが、一般的にいても古墳祭祀に一定程度の差のあったことがうかがえる。

装飾土器は死の再生、穀物の豊饒・再生産を願望する模倣儀礼を表現したものと推定された。そして鳥形・騎馬人物形・船形・車形土器は葬送儀礼において他界観が表象されたものと想定された。それはまた新羅・伽耶における他界観・死生観に表現の差が存在したからかもしれない。鳥・騎馬人物・馬・船・車に表象された多様な他界観が存在したことはうたがいのないところである。そこに新羅・伽耶における祭祀⁽¹⁰⁾の実態をかいまみることができよう。

謝 辞

小稿を草するにあたって、有光教一・岡崎敬・堀田啓一・金関恕・水野正好・西谷正・白石太一郎・泉森峻・岡内三眞・尹根一・高浜秀・早乙女雅博・田中俊明・千田剛道・新谷武夫・定森秀夫・阪口俊幸・京都大学考古学研究室・東京国立博物館の諸先生・諸機関からご教示を賜わり、資料の提供をうけた。また共同研究に際しての諸先生からのご教示に感謝の意を表したい。

〈引用文献（ABC順）〉

- 穴沢和光1972 「慶州金鈴塚考—古新羅王族墓の編年的序列」(『古代文化』169)
 有光教一1933 「慶州積石塚出土の農具に就いて」(『朝鮮』215)
 有光教一1955 「新羅焼の変遷」(『世界陶磁全集』13)
 東 潮1979 「朝鮮三国時代の農耕」(『檀原考古学研究所論集』4)
 東 潮1984 「蛇行状鉄器考」(『檀原考古学研究所論集』7)
 崔秉鉉1983 「古新羅積石木槨墳研究(上)(下)—墓型과 二性格을 중심으로—」(『韓国史研究』31, 32)
 鄭在鏞1975 「皇州皇南洞味鄒王陵内旧道路面内廢古墳発掘調査」(『韓国考古学年報』2)
 鄭澄元・申敬澈1983 『東萊福泉洞古墳群』I
 晋州博物館1984 『국립진주박물관』
 秦弘燮1974 『土器土偶瓦磚』(『韓国美術全集』3)
 秦弘燮1976 『三国時代의 美術文化』
 朝鮮考古学会1941 『白神壽吉氏蒐集考古品図録』
 朝鮮考古学会1944 『杉原長太郎氏蒐集品図録』
 趙由典1978 「鉄器類」(『雁鴨池発掘調査報告書』
 中央博物館1964 『陳列品図録』
 中央博物館1971 『湖巖蒐集韓國美術特別展』
 土肥孝1983 「日本古代における犠牲馬」(『文化財論叢』
 鏡方貞亮1968 「三国史記にあらわれた麦と表作について」(『朝鮮学報』48)
 藤井保夫1984 「近畿地方(2)—紀伊地域—」(『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る』)
 藤沢一夫1955 「百済の土器陶器」(『世界美術全集』13)

- 河孝吉1979 「새 (鳥)·龍王船考」(『韓國民俗學』11)
- 浜田耕作1927 「朝鮮の新羅焼」(『民族』2-3) 『東亞考古學研究』1943所収
- 浜田耕作·梅原末治1924·27 『慶州金冠塚と其遺寶』(『古蹟調査特別報告』3)
- 韓炳三1971 「先史時代農耕文青銅器에 대하여」(『考古美術』112)
- 梨花女子大學校博物館1978 『명기와고지』
- 今西龍1908 「新羅時代の土器に彫刻せる神話」(『人類學雜誌』262) (『新羅史研究』所収)
- 今西龍1920 「慶尙北道, 達城郡, 高靈郡, 星州郡, 金泉郡, 慶尙南道咸安郡, 昌寧郡調査報告」(『大正六年度古蹟調査報告』)
- 李蘭暎1976 『신라의토우』
- 李蘭暎1981 「漢代雜伎像과一部新羅土偶와의關係」(『美術資料』28)
- 李蘭暎1983 「古新羅の土偶(上)·(下)一獨立土偶一」(『韓國文化』1981-2, 3)
- 李壽官1977 「風土と環境」(『韓國のやきもの』1 新羅)
- 李殷昌1970 「伽耶地域土器의研究—洛東江流域出土土器의樣相을中心으로」(『新羅伽耶文化』2, 伊藤秋男訳1973 『1970年朝鮮考古學年報』)
- 李殷昌1971 「高靈良田洞岩刻畫調査略報」(『考古美術』112)
- 李殷昌1972 「土器」(『韓國の考古學』)
- 李殷昌1974 「慶州皇南洞味鄭王陵前地域古墳群發掘調査」(『韓國考古學年報』1)
- 李殷昌1976 「皇南洞古墳出土神龜形土器와 角坏밧 角坏받침—新羅·伽耶地域의 異形土器와 關連하여」(『考古美術』132)
- 李殷昌1977 「歷史と技術の傳統」(『韓國のやきもの』1)
- 李殷昌1978A 「有孔広口小壺」(『考古美術』136·137)
- 李殷昌1978B 「馬刻文土器와馬形土器」(『考古美術』138·139)
- 李殷昌1980A 「新羅古墳形成過程에 關한 研究—古墳築造樣式變遷을 中心으로」(『三國遺事의新研究』)
- 李殷昌1980B 「新羅馬刻文土製品과伽耶鎧馬武人像土器—古代韓國人의騎馬風習과神馬思想과關連하여」(『新羅伽耶文化』11, 龜田修一訳1982 『古文化談叢』)
- 李殷昌1981 「新羅·伽耶土器編年에 關한 研究」(『暁星女子大學校研究論文集』23)
- 李殷昌1983 「新羅土偶에 나타난 民俗」(『新羅民俗의新研究』)
- 伊藤秋男1974 「耳飾の型式學的研究に基づく韓國古新羅時代古墳の編年に関する一考察」(『朝鮮學報』64)
- 金閔恕1975 「彌生人の精神生活」(『古代史發掘』4)
- 金閔恕1982 「神を招く鳥」(『小林行雄博士古稀紀念論文集—考古學論考』)
- 樺本杜人1955 「図版解説」(『世界陶磁全集』13)
- 金載元1962 「새로 發見된土器數種」(『美術資料』6)
- 金載元·金元龍1955 『慶州路西里双床塚·馬塚·138号墳調査報告』(『國立博物館古蹟調査報告』2)
- 金廷鶴1979 「伽耶土器」(『世界陶磁全集』17)
- 金鍾徹1981 『高靈池山洞古墳群』
- 金宅圭·李殷昌1975 『皇南洞古墳發掘調査概報』
- 金元龍1960 『新羅의土器研究』
- 金元龍1962 「三國時代動物形土器試考」(『美術資料』6)
- 金元龍1969 「新羅家形土器考—古代韓國에 있는의 南方的要素」(『金載元博士回甲紀念論叢』)
- 金元龍1970A 「鳥形안대나式細形銅劍의問題」(『白山學報』8) (岡内三眞訳1973 『1970年朝鮮考古學年報』)
- 金元龍1970B 「新羅鳥形土器小見」(『考古美術』106·107, 新谷武夫訳1974 『芸備』2)
- 金元龍1973 『原始美術』(『韓國美術全集』1)
- 金元龍1978 「新羅伽耶動物形土器小考」(『韓國學報』13)

- 金元龍1979 「古新羅の土器と土偶」(『世界陶磁全集』17)
- 金元龍1981A 「古新羅의 土器와 土偶」(『韓國의 美術』5)
- 金元龍1981B 『新羅土器』(『韓國의 美術』1)
- 金元龍1984 『韓國考古学概説』(西谷正訳1984)
- 北野耕平1972 「古代の東アジアにおける船舶形態考—日本と韓国出土の船形土製品類の意義—」(『神戸商船大学紀要文科論集』20)
- 慶州博物館1973 『国立慶州博物館名品選』
- 小泉頭夫・野守健1931 『慶尙北道達城郡達西面古墳調査報告』(『大正7年度古蹟調査報告』)
- 小泉頭夫1969 「新羅の土偶」(『考古学ジャーナル』38)
- 久貝健1975 「朝鮮における裝飾付有蓋高坏とその世界」(『古代研究』7)
- 松本信廣1954 「古代伝承に表われた車と船」(『日本民俗学』4, 『論集日本文化の起源』所収)
- 松本信廣1971 「解説」(『論集日本文化の起源』3)
- 松前健1971 『日本神話の新研究』
- 三上次男1977 「北九州の裝飾古墳と韓国高靈の岩壁画」(『日本歴史』344)
- 三品彰英1969 「首露伝説—祭儀と神話—」(『三品彰英論文集』4)
- 毛麒喆1979 「池山洞44号古墳出土動物遺骸에 對한 考察」(『大伽倻古墳発掘調査報告書』)
- 文化財管理局1975A 『天馬塚発掘調査報告書』
- 文化財管理局1975B 『慶州地区古墳発掘調査報告書』1
- 文化財管理局1976 『慶州皇南洞98号古墳(南墳)発掘略報告』
- 文化財管理局1978 『雁鴨池』
- 文化財管理局1980 『慶州地区古墳発掘調査報告書』2
- 小田富士雄1971 「古代形代馬考」(『史淵』105・106)
- 小田富士雄1976 「集安高句麗積石墓遺物と百濟・古新羅の遺物」(『古文化談叢』6)
- 大井剛1984 「出土遺物による朝鮮原始原仰の研究」(『東方学』67)
- 大竹弘之1982 「金海府院洞遺跡出土の二・三の遺物」(『考古学と古代史』)
- 方善柱1964 「古新羅의 靈魂과 他界觀」(『四大学合同論文集』)
- 白甲鏞1966 「古墳出土의 動物遺骸에 關한 報告」(『仁同・不老洞・高靈古衙古墳発掘調査報告』)
- 釜山市立博物館1979 『釜山市立博物館開館展図録』
- 扶余博物館1977 『扶余博物館陳列品図鑑—先史・百濟文化—』
- 柴田常恵1908 「朝鮮の古墳発見土器」(『人類学雑誌』268)
- 新谷武夫1977 「在広島県朝鮮考古美術資料I」(『芸備』5)
- 沈奉謹・李容玆・丁仲煥1981 『金海府院洞遺蹟』(『東亜大学校博物館古蹟調査報告』5)
- 斎藤忠1937 「慶州皇南里第百九号墳・皇吾里第十四号墳調査報告」(『昭和9年度古蹟調査報告』)
- 崇田大学博物館1979 『승전대 학교부설 한국기독교박물관과』
- 斎藤忠1940 「大邱府付近における古墳の調査」(『昭和13年度古蹟調査報告』)
- 竹田旦1983 『木の雁—韓國の人と家—』
- 天理ギャラリ1980 『韓國古代の陶器』
- 東京国立博物館ほか1976 『韓國美術五千年展』
- 東京国立博物館1982 『寄贈小倉コレクション目録』
- 梅原末治1931・33 『慶州金鈴塚飾履塚』
- 梅原末治1946 『朝鮮古代の墓制』(『大正13年度古蹟調査報告』)
- 嶺南大学校博物館1982 『博物館図録』
- 楊洪準1979 「池山洞44号古墳出土魚類遺骸에 對한 考察」(『大伽倻古墳発掘調査報告書』)
- 楊洪準1981 「高靈池山洞古墳에서 出土된 動物遺骸에 關한 考察」(『高靈池山洞古墳群』)
- 尹世英1975 「味鄒王陵地区第9区域(A号破壊古墳)発掘調査報告」(『慶州地区古蹟発掘調査報告書』1)

〈註〉

- (1) 本稿は、1975年2月、筆者が九州大学大学院に在学中、岡崎敬教授に提出したレポートが骨子となっている。同年「邪馬台国への道」踏査に参加する機会があり、その際国立中央博物館や慶州博物館で異形土器を実見することができた。また宍岐沖で故井上光貞館長と野性号に同乗する機会があったことが思い出される。
- (2) 小泉頭夫1969の「新羅の土偶」によれば、「この種の形象土器や土偶を飾る土器はわが国の須恵器としても私共が異形土器と仮称して来たように」と述べられている。
- (3) 鳥形土器にかぎらず、異形土器を研究資料とする際、次の指摘には留意する必要がある。
「近来は新羅土器製作技術が発達し、そうした類似品などが、ほんとうに当時の一形式群を形成していたのか、あるいは範本を真似た巧妙な現代仮作の一群であるのか、自信をもって断言しえないのが率直な心情である」(金元龍1978)
- (4) ⑤の脚は復元である。確かに写真のみでは区別しがたい。復元の方法・あり方は真贋の区別とともに注意すべきであろう。
- (5) 『原色日本鳥類図鑑』によれば、朝鮮半島に飛来・蕃殖する雁・鴨は、ヒシクイ・アカツクシガモ・カンムリツクシガモ・ツクシガモ・カルガモ・オシドリ・アカハジロ・シノリガモなどである。とくにヒシクイは「シベリア東北部にて蕃殖し、……渡来の主な経路は(1)樺太・北海道を経由するもの、(2)シベリア大陸より日本海を越えて北陸地方に渡来するもの、(3)朝鮮から九州に渡来するもの三つ」があるという。鳥形土器は、このヒシクイやカンムリツクシガモ、そしてアヒルの原種であるというマガモを模倣したものと思われる。
- (6) 韓国において「木雁」は結婚式儀礼に今日も用いられている。「婚姻するとき、新郎は奠雁祀として新婦の家に木雁をもってゆき献げる。元来は生きた雁を用いたが、たいへんなので、たいてい木を削った木の雁を彩色するか、あるいはそのまま用い、ときには紙でつくったものもみられる」(『韓国民俗大観』1)という。雁は「随陽鳥」とよばれ、羽(鳥類)・毛(獣毛)・鱗(魚)の中で天性として信用の置けるものとされ、「雁の習性・姿態が、貞節・従順・信義・愛情の深い吉鳥と見立てられた」(竹田旦1983)という。この習俗はおそくとも李朝時代にさかのぼるようである。
- (7) 同論文において、太陽象徴としての円、円心円、輪十字のあることが端的に指摘されている。とくに輪十字文あるいは十字文土製品が慶州仁旺洞古墳群において出土しているのである。この十字文土製品は馬刻文土製品と同様、高坏内におさめられた状態で出土した(李殷昌1980)。筆者はこの十字文はまさに太陽を表象したものと理解している。なお考古資料として、太陽信仰を如実に表現したものに、慶州出土の線刻文土器があげられる。これについては拙稿1985「新羅の線刻文土器をめぐって」(『末永先生米寿記念文献呈論文集』)を参照されたい。
- (8) 京都大学の岡内三真氏、東京国立博物館の高浜秀・早乙女雅博氏のご好意で実見することができた。なお慶州において、新羅焼の復元に成功した柳孝雄窯では各種の異形土器が製作されている。そのさい、約20日間「日陰の風通しのよい場所でゆっくり乾かしてゆくらしい」(李壽官1977)。鶏林路出土の装飾土器も復元製作されているが、一定程度乾燥を終えた段階で土偶を貼りつけている(李壽官1977図版30)。
- (9) わが国の初期須恵器である福岡県羽根戸古墳出土の装飾付器台のモチーフの一つである亀の表現が福泉洞10号墳の器台の亀と酷似する。ただし前者は壺と器台の融合した形態のものであるが。なお今日、新羅・伽耶から将来された異形土器は、奈良県橿山市南山4号墳出土の脚台付動物形土器、和歌山市六十谷の家形土器、奈良県桜井市や東大阪市出土の異形広口扁瓶などがある。
- (10) 統一新羅時代の慶州雁鴨池においては、上記の鉄馬いかに馬骨・馬歯・犬・鶏・鴨などの動物骨、木像、木製陽物が出土している。木製人形①は、全長18.5cm、直径1.8cmの丸木で作られ、その一面に頭部、顔面が表現されている(図3-1)。②は全長23.0cm、直径2.3cmの丸木に顔面・頸部・胴部が彫刻されている(図3-2)。陽物(男根)は2個出土した。そ

の1は、全長17.0cm、直径4.3cm、2は全長13.5cm、直径3.0cmのものである。いずれも7世紀末から8世紀代のものとみられる。

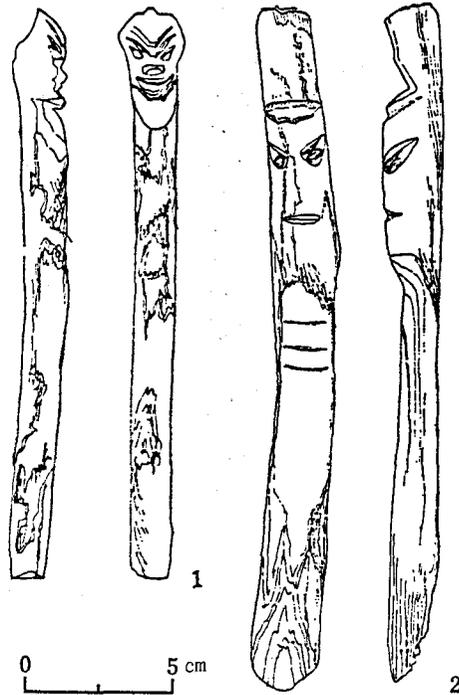


図3 慶州雁鴨池出土の木像(文化財管理局1978)

<図版出典>

図版1. 1 (今西龍1920), 2・4 (東博1982), 3 (梨花女子大博1978), 5 (金元龍1979), 6 (梨花女子大博1978), 7 (金元龍1979), 8 (金元龍1979), 9 (有光教—1955)。

図版2. 10 (京大蔵), 11 (李殷昌1977), 12 (金元龍1979), 13・14 (金元龍1979), 15 (金元龍1979), 16・17 (中央博1964), 18・19 (金廷鶴1979), 20 (梨花女子大博1978)。

図版3. 21 (梨花女子大博1978), 22 (秦弘燮1974), 23 (岐阜・飛騨歴史民族博物館蔵), 24 (柴田常恵1908), 25 (朝鮮考古学会1941), 26・27・28・29 (文化財管理局1975A), 30・31 (金元龍1979)。

図版4. 1 (金元龍1979), 2 (梅原末治1931・33), 3 (秦弘燮1974), 4・5 (東博1982), 6 (李蘭暎1983)。

図版5. 1・2 (中央博1971), 3 (有光教—1955), 4・5 (金元龍1979), 6 (東博1982), 7 (中央博1971), 8 (晋州博1984), 9・10 (京大蔵), 11・12 (秦弘燮1974)。

図版6. 1 (阪口俊幸氏提供), 2 (金廷鶴1979), 3・4 (東博1976), 5 (“Treasures from Korea—Art through 5000 years”), 6・7 (秦弘燮1974)。

図版7. 1 (晋州博1984), 2・3・4 (有光教—1955), 5・6 (金元龍1979), 7 (梨花女子大博1978), 8 (金載元1962), 9 (中央博1971), 10 (金元龍1979)。

図版8. 1・2 (金元龍1979), 3 (松本信廣1971), 4 (梨花女子大博1978), 5・6・7 (中央博1971)。

図版9. 1 (金元龍1969), 2・3 (有光教—1955), 4 (朝鮮考古学会1944), 5 (中央博1971), 6・7 (中央博1971), 8 (崇田博1972), 9 (『世界陶磁全集』2, 1979), 10 (金元龍1979)。

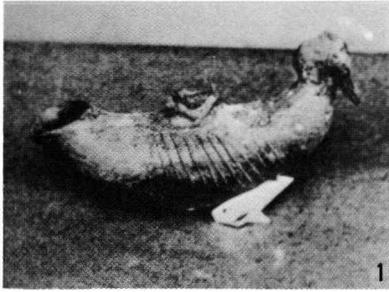
図版10. 1 (梨花女子大博1978), 2 (東博1982), 3 (秦弘燮1974), 4 (梨花女子大博1978), 5・6・7 (久貝健1975), 8 (齋藤忠1937), 9 (嶺南大博1982)。

図版11. 1 (東博1982), 2・3 (李蘭暎1976), 4 (秦弘燮1974), 5 (東博1982), 6・7・8・9 (有光教—1955)。

図版12. 1・3 (金元龍1979), 2 (天理ギャラリー—1980), 4 (『朝鮮古蹟図譜』3), 5・7 (有光教—1955), 6 (嶺南大博1982), 8 (李蘭暎1976), 8 (金元龍1979)。

図版13. 1・2 (東博1982), 3 (秦弘燮1974), 4 (嶺南大博1982), 5 (鄭澄元・申敬澈1983), 6・9 (秦弘燮1974), 7 (東博1976), 8 (晋州博1984), 10 (金元龍1979)。

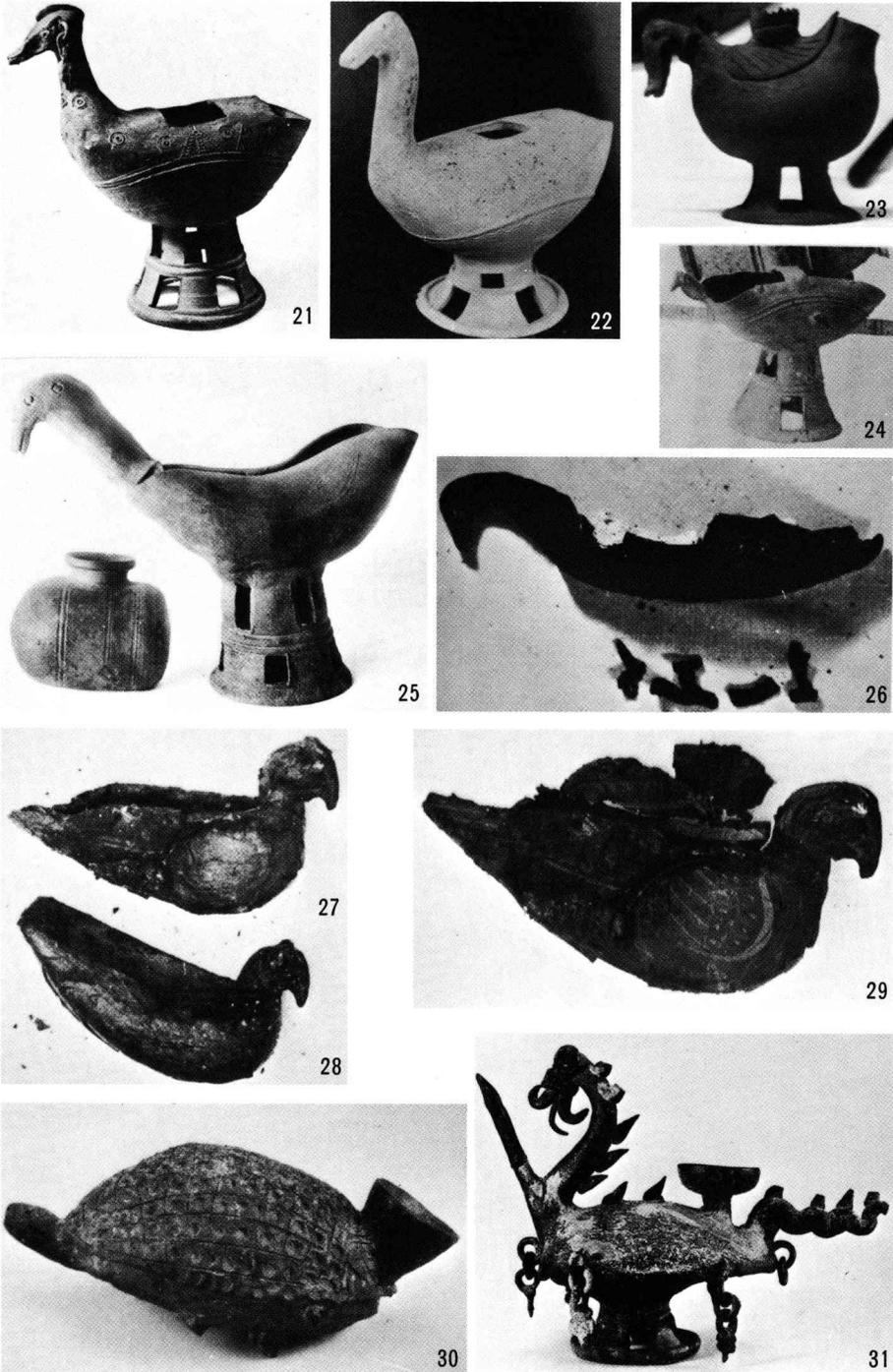
(奈良県立橿原考古学研究所)



1. 慶尚南道・咸安34号墳 2. 出土地不詳(東博) 3. 出土地不詳(梨大博)
4. 出土地不詳(東博) 5. 出土地不詳(大英博) 6. 出土地不詳(梨大博)
7・8. 出土地不詳(湖巖美) 9. 伝慶尚北道・昌寧(東博)



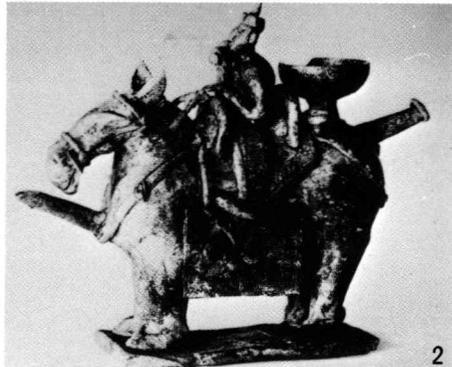
10. 出土地不詳（京大） 11. 出土地不詳（慶北大博） 12. 出土地不詳（梨大博）
13・14. 出土地不詳（湖巖美） 15. 出土地不詳（梨大博） 16・17. 出土地不詳（中央博）
18・19. 慶北・金陵郡（釜山市立博） 20. 出土地不詳（梨大博）



21. 出土地不詳（梨大博） 22. 出土地不詳（嶺南大博） 23. 出土地不詳（岐阜飛騨歴民博） 24. 出土地不詳（東大） 25. 伝慶南・陝川（国立博） 26. 慶州・天馬塚（慶州博） 27. 出土地不詳（慶州博） 28. 出土地不詳（慶州博） 29. 出土地不詳（慶州博） 30. 出土地不詳（慶州博） 31. 慶州・神龜塚（慶州博）



1



2



3



4



5

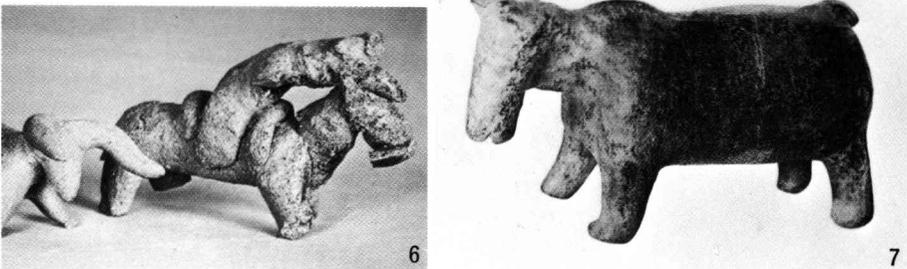
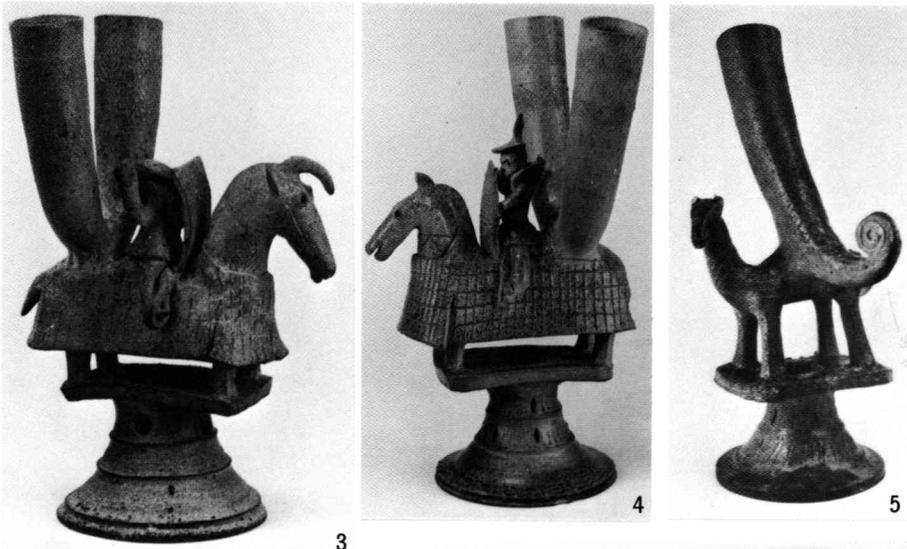
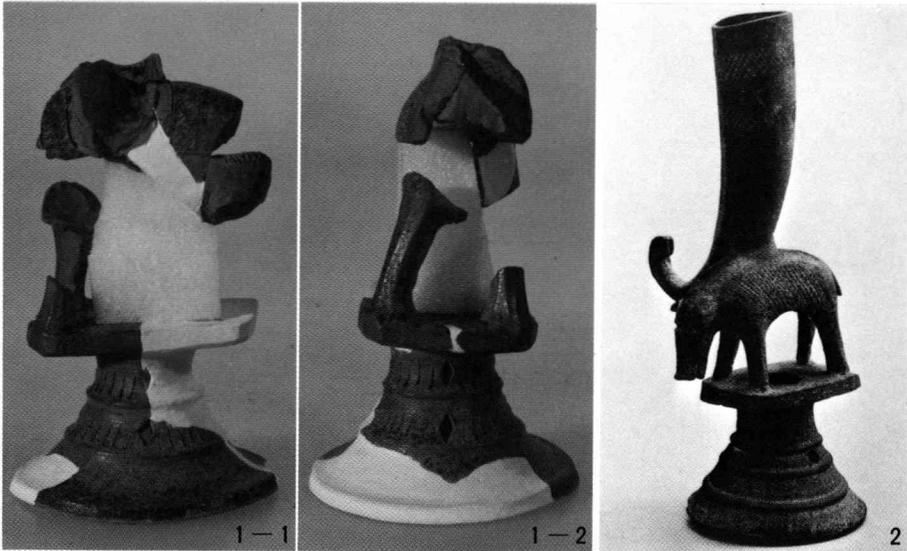


6

1. 慶州·金鈴塚 (中央博) 2. 慶州·金鈴塚 (中央博) 3. 出土地不詳 (慶州博) 4. 慶北 (東博) 5. 慶南·昌寧 (東博) 6. 出土地不詳



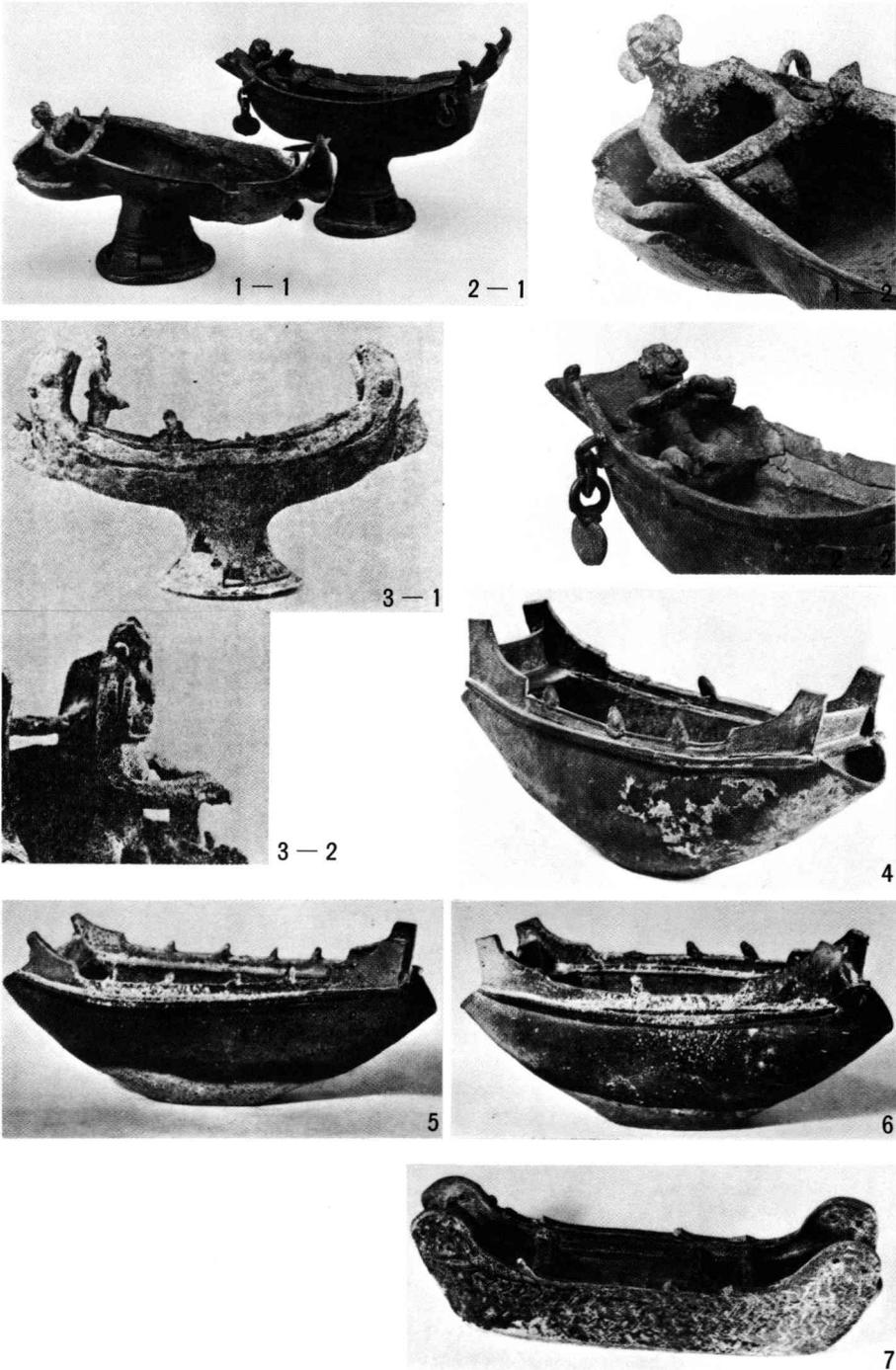
1. 慶北・玄風 (中央博) 2. 出土地不詳 (中央博) 3. 慶州 (東博) 4・5. 釜山・福泉洞古墳 (東亞大博) 6. 出土地不詳 (東博) 7. 出土地不詳 (東博) 8. 慶南・府院洞 (東亞大博)



1. 奈良・南山4号墳(橿原市教委) 2. 出土地不詳 3. 出土地不詳(李養瓚)
4. 出土地不詳(李相潤) 5. 出土地不詳 6. 出土地不詳(中央博) 7. 出土地不詳(慶北大博)



1. 咸安34号墳(晋州博) 2. 出土地不詳(崔圭珍) 3. 慶南・昌寧(東博)
 4. 出土地不詳(東博) 5・6. 伝慶尚南道(中央博) 7. 出土地不詳(梨大博)
 8. 出土地不詳(ヘンダーソン旧蔵) 9. 出土地不詳(湖巖美) 10. 慶州・鷄林
 路25甕棺墓(慶州博)



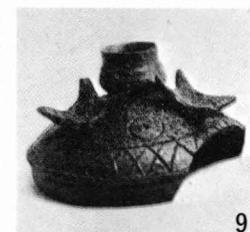
1・2. 慶州・金鈴塚 (中央博) 3. 伝慶北・玄風 (方善柱) 4. 出土地不詳 (梨大博) 5・6・7. 出土地不詳 (湖巖美)



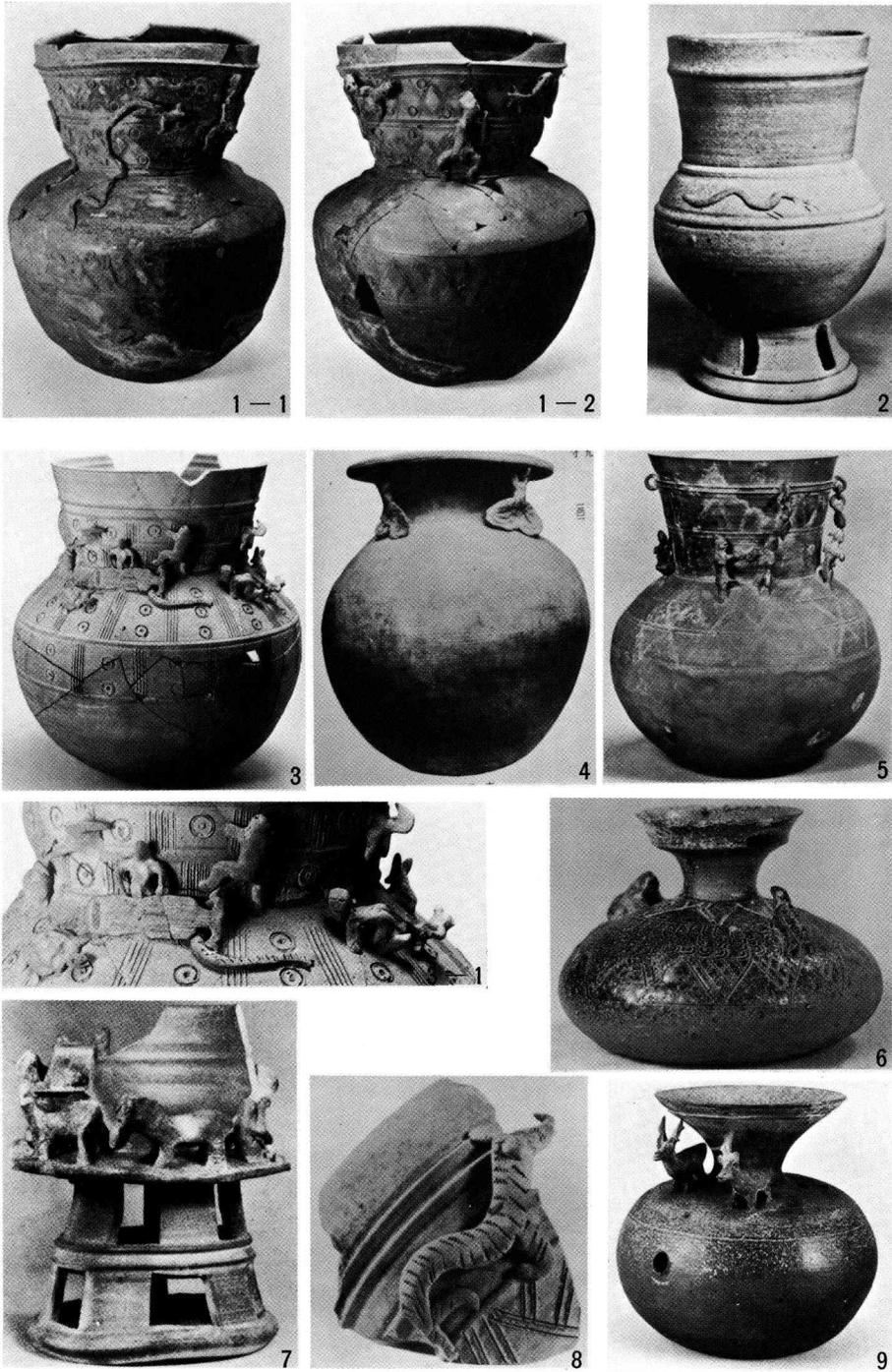
1. 出土地不詳(金潤) 2. 慶南(東博) 3. 出土地不詳(梨大博) 4. 伝慶南・陝川(慶北大博) 5. 出土地不詳(慶州博) 6・7. 出土地不詳(湖巖美) 8. 出土地不詳(崇田大博) 9. 和歌山・六十谷(東博) 10. 慶州・普門洞(慶州博)



1. 出土地不詳（梨大博） 2. 慶北・善山（東博） 3. 出土地不詳（慶州博）
4. 出土地不詳（梨大博） 5. 慶州・皇南洞（市田次郎旧蔵） 6. 慶州・皇南洞
（市田次郎旧蔵） 7. 慶州・皇南洞（中央博） 8. 慶州109号墳（中央博）
9. 慶州・仁旺洞古墳（嶺南大博）



1. 出土地不詳(東博) 2・3・4. 出土地不詳(中央博) 5. 出土地不詳(東博)
6・7. 慶州・皇南洞(中央博) 8・9. 出土地不詳(中央博)



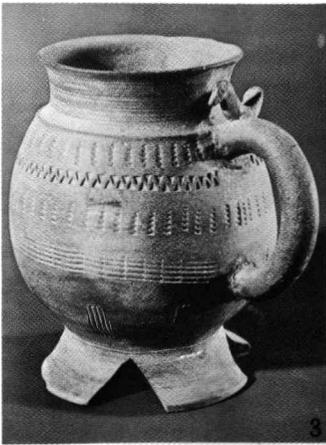
1. 慶州・路東洞11号墳（慶州博） 2. 出土地不詳（天理参考館） 3. 慶州・鷄林路16地区30号墳（慶州博） 4. 出土地不詳 5. 出土地不詳（東博） 6. 出土地不詳（嶺南大博） 7. 出土地不詳 8. 出土地不詳（中央博） 9. 出土地不詳（慶州博）



1



2



3



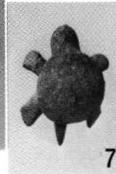
4



5



6



7



8



9



10

1. 慶南 (東博) 2. 慶北·開慶 (東博) 3. 出土地不詳 (東亞大博) 4. 慶州·仁旺洞古墳 (嶺南大博) 5. 釜山·福泉洞11号墳 (釜大博) 6. 出土地不詳 (中央博) 7. 出土地不詳 (東博) 8. 慶州 (中央博) 9. 出土地不詳 (慶北大博) 10. 出土地不詳? (中央博)